

# 川柳塔

昭和五十六年七月十五日発行  
創刊大正十三年 通卷六五〇号



日川協加盟

No. 650

七月号

つめたさに、おいしさをそえて……………

# アイスクャンデー

あずき・チョコ・ミルク・パイ



高島屋 そごう 松坂屋 阪神 ドーゾマ店  
近鉄(アベノ・上六・奈良・東大阪・京都各店)

サン・ストア(中之島・淀屋橋各店)

京阪モール 新川売店 虹のまち鹿鳴

南海難波駅構内店



大阪・なんば



TEL (641) 0551

姉妹品大和錦印



# 柔道衣 剣道具

早川繊維工業株式会社

大阪支店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1  
電話(779)1690~2番

警察庁・警視庁  
全国府県警察  
大阪府警察本部  
講道館・御指定

## 夏 座 敷

追いぐられたお膳の鯛を見比べる

船遊びユラユラ沈む落しもの

船遊び今鳴る鐘は大悲閣

船遊び千鳥ヶ渚で二人降り

今だから笑える話くり返し

生々庵主幹が、御年齢による身体の不調で四日間K病院へドック入りされて、目下自宅静養中のこととて、この度七月号の扉を書けと代打を仰せつかった。尤も代打はホームランを打つ場合もあるが、空振り三振に終る場合が多い。

雑誌の顔である扉となると、自然構えてしまうので仲々ペンの進みが遅い。

愈々暑さも本番の七月になった。昨年は冷夏という名の夏であったが、今年是如何だろうか。六月の初めに熱気の為、片町線の鉄道線路が曲つたと新聞は報じた。三年前には、熱帯夜という言葉が新造された。そしてクローラーの在庫が底をついた。

冷房のなかつた昔は、それなりに涼しく暮らす知恵があった。俳句の季語に夏座敷というのがある。風通しもよく、調度のすべてを夏拵えて涼しげに見える座敷のことだ。襖をはずして葎戸を入れる。「葎障子はそみの風

の来たりけり」葎戸越しの風はひそかな風だが涼しい。又簾も夏の風物詩の清々しいもの一つだ。

一日を楽屋でくらす簾かな

之は今も亡き新派の大女優水谷八重子の作だ。明治座か新橋演舞場の楽屋だろう。

日本には夏には夏の涼しい拵えがあるのに今は料亭に行っても、何処へ行っても、クローラーである。形水さんの句に、

クローラーの野暮川風の窓を閉め

というのがある。大川端の船座敷か北浜の花外楼の座敷の句であろう。とまれ、夕涼みよくぞ男に生れけりのような時代がなつかしい。

主幹の容態について他の柳社の方々から御見舞の言葉をいただき厚く感謝しているが唯脚力が弱っていられるので、目下そのリハビリをしておられるとのことですから、各位には何卒御安心下さるよう申添えておきます。

西 尾 葉

川 柳 塔 七 月 号



座右の句

酒とろりとろり大空の心かも

(路一郎)

私の句

頂上の空気がとっても美味しい夏

国弘 半休門

# 川柳塔 七月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

夏座敷

今年之路郎忌

■川柳大平記(38) 落書時代の農民たち

■連載 誹風柳多留廿六篇研究(二二丁)

川柳塔(同人吟)

水煙抄

秀句鑑賞

■特集 路郎を知らぬ路郎論

愛染帖

西尾 栞 …… (1)

橘高 薫風 …… (2)

東野 大八 …… (22)

西尾 栞選 …… (4)

正本水客選 …… (28)

若柳 潮花 …… (26)

植村客遊子 …… (27)

醉々・千代・鬼遊・夕花

射月芳・寿子 …… (38)

橘高 薫風選 …… (43)

## 今年之路郎忌

橘高 薫風

五月二十四日、戸田古方追悼句会が豊中央公民館で開催された日、西田柳宏子、高杉鬼遊のお二人と私は、入院されたばかりの菊沢小松園さんを府大付属病院にお見舞いした。その帰途、鬼遊さんが元の不朽洞(麻生路郎居)を知らぬというので、近くだから寄って見ることにした。

住吉区万代西五丁目二五番地の不朽洞は、その地の西・南の角をまわした一角だったが、驚いたことにその辺り四軒程は新築に様変わりしていて、「新築分譲中」の旗が二十数本派手にはためいていた。敵の手に渡った城の旗指物を空しく仰ぐ思いで、三人三様に眺めやったのである。

七月十日の路郎先生の誕生日には、ご夫婦で一入うれしいお酒を召し上った書斎兼用の居間の跡形もない。庭のいちじくの木はどっぴなっぴなろうか。

三人は道を北へとり万代池に向った。約五分で池畔に至り、池を巡るには十分程かかる路郎先生格好の散策の場であった。

神戸ポルトピア見学記

■ 随想 明治は遠く

「炎」

一路集「本心」

「倉」

初歩教室

大萬川柳「駈け足」

柳界展望

本社六月句会

各地柳壇◇佳句地10選

一分間の柳論

編集後記

前山 北海 …… (46)

若本 多久志 …… (47)

工藤 甲吉選 …… (48)

大峠 可動選 …… (48)

川端 柳子選 …… (49)

本田 恵二朗 …… (50)

川村 好郎選 …… (52)

柳界展望 …… (54)

本社六月句会 …… (55)

各地柳壇◇佳句地10選 …… (59)

一分間の柳論 …… (51)

編集後記 …… (65)

薫風・酔々・鬼遊・史好

座右の句

六十一まだ情熱は燃えに燃え

私の句

隅に咲く花花なりの夢を持ち

(路郎)

大道 美乙女

私は、昭和三十三年四月九日の編集局主催の夕桜句会を思い出す。古方、潮花、梅志、一三天、宏子、薫風子の編集部員に、ゲストは、生々庵夫妻、葉、文蝶の諸氏。五色の短冊は霞乃、梅志お二人の筆。路郎先生自ら、梅志、宏子さんとそれらを桜の枝に吊り下げられた。夜来の雨は上ったものの、午前中に雨男の生々庵現主幹から進退伺いが出たのだった。

夕桜風呂の帰りの人も寄り  
酒さめた頃の雪洞美しく  
路郎

目の前の桜にうとく住み馴れて  
ものたりぬ顔花だけを見て帰り  
文蝶

夕桜電気の色も悪くなし  
花吹雪女は襟をかきあわせ  
小石

泥んこの靴横にある夕桜  
花の下酒のまぬも踊らされ  
古方

夕桜独りのポルト漕ぎ戻る  
現実の三人は池の中心にある中の島に渡つた。  
梅志

「この辺りにポルト屋があつて、僕の子供の頃は食用蛙をよく捕りに来たもんや」と柳

宏子さん。今はポルト屋もなく、池の大部分に菱が繁茂している。花は散り人は亡し。霞乃先生もこの世におられない今年、路郎忌はまことに淋しい。

酒たんとまいらそり今年、路郎忌は

ひさびさにさしつさされつなざりませ

# 川柳塔

## 西尾 栞選

倉敷市 田垣方大  
ベッドシーン妻泰然と編んでいる  
座をはずす時も心得秘書の役

真剣でない柏手の觀光地  
五月雨に男女型あり予報官

年金の記事目を皿のようにする

松原市 谷垣史好  
苛立ちをしずめる匂い古本屋  
背を向けたときから愛が甦えり

黒い帽子が似合うけだるい人生よ  
煙ひとすじ立たぬ火葬はさびしいな

クリーニングにあれもこれもと出す女  
神戸市 山口美穂

威美人草妬心の花びらの一つ落つ  
山 口 美 穂

都忘れわたしの焦りなど知らず  
思い余ってたづねた答えが返らない

茶碗割れていらだちの日が無事終る  
山盛りのサラダ若くありたい願いかも

倉敷市 野田素身郎  
勤行で鍛えマイクを離さない  
乗る場所は親子で違う通勤車

聞くだけ聞いたのを賛成と受けとられ  
閑職へ大きな机あてがわれ

連休は勤務雨々もつと降れ

大阪府 河野君子  
煽られやすき女ごころへ南かぜ  
一度は何かに狂ってみたい血を残し

地獄へゆく資格はとづくに積んでいる  
一番の敵を愛児と思うべし

鉄錆のように父の老斑よ

大阪市 小出智子  
好きなことしたらと妻がそそのかす

いたわりの言葉をさみしく聞くことも  
憧れたほどの生活がもの足りず

旅便り親の心はまだ知らず  
單純に花を届けただけのこと

竹原市 山内静水

ご指名へ広島弁を恥らわず  
命ふと想うみどりに宿る露

いざペンを執ると言葉の貧しかり  
目を皿にしても一円だつて落ちていず

甚六の気まぐれ肩をもんでくれ

桜井市 岩本雀踊子

物思い花緒のゆるい女下駄  
愚痴一つ聞かせぬ妻を愛すべし

腕組をとかぬ味方のない男  
敬老の日の夫婦に喧嘩の種がない

あわて者などはおらぬカタツムリ

八尾市 高杉鬼遊

赤い薔薇ほどにも人を愛せるや  
てっせんの紫に棲むうすなさけ

西成の飲み屋ででかい話なり  
天井を見上げる雨がふつてくる

鬼遊忌のことなど妻と話し合う

尼崎市 黒川紫香

待ち呆けの前でつかまるスリが居る  
留守番をしてゴキブリに睨まれる

末法へ無念を消さぬ平家蟹

テープカットちっちゃな社長に髭がある  
化粧そうな女が酒を酌ぎたがり

虫の音が聞ける都会の端に住み  
高槻市 若柳潮花

手のとれた人形と焼却場へ行く  
兔小屋俺も昭和の枯すすき

宿帳へ嘘書いている夜のドラマ  
マニキュアの指が男を押しつぶす

青森市 工藤甲吉

我が孫はすでに大学コイノボリ  
今生の我が身は一つ薬づけ

せんぶりの苦さ愛用されている  
ナセば成る尊さ足を手に使い

離れ住んで血のつながりをひしと知る  
八尾市 香川酔々

煩惱に揺れて傾く独楽の芯  
頃は佳し桂馬の跳ねるタイミン

人生の無題おだやかな海を見る  
千金は無いが度胸は持っている

山男山から降りて渋滞す  
岡山県 嘉数兆代賀

泣かされた想い出心の楯として  
まっすぐに歩けば風も陽も味方

すこしとぼけて相手の肚をよんでいる  
歳月は流れてわたしだけ残す

倅せな余生茶漬が音をたて

峯寺にて

島根県 藤井明朗

歴史の名残りが山まで続く庭  
ゆつくりと歩けば坂の連れが出来

現金を握ると欲が離れない  
坂道に来て幸せな風に逢い

耐え抜いて心あずける子は別居

今治市 月原宵明

真実は世間の端へ追いやられ  
両の掌に七十年のわが歴史

人間の不実が花に裏切られ

幸薄き女写経の墨を噛み

浄土いま路郎葎乃に深みどり

大阪市 中川滋雀

楼蘭の風が乾いている歴史

天山の水がしたたる曼陀羅図

流れ矢の死角で生きることにする

金と暇ない幸せの城もある

タイトルが浮んだ雲の風まかせ

泉佐野市 阿萬萬的

職のない日々を孫からあてにされ

善人の夫婦で趣味の歩が合わず

底抜けの空大路のれんげ草

土の冷え飛鳥佛の美にふれる

借景のお庭は四季に逆らわず

鳥取市 河村日満

団体にまぎれて寺のゆかりなど  
仰向いて見る西塔も雨の中

掘り出して古墳にかわる石舞台

国宝技術をカセットで聴く二絃琴

訊いてすぐ忘れるもよし飛鳥ゆく

大阪市 金井文秋

余裕が出来て人相から変る

自販機は気楽でよいと云う無口

無視してる横顔ばかり気にかかり

はしやぎ疲れると孤独が待つ女

控え目な演技女を忘れない

竹原市 小島蘭幸

風みどり産後の妻の明るさよ

寝とれとは言うたが台所の広さ

市場籠せめて制服脱いで来た

洗濯機くるくる一人増えました

洗濯機家族四人という重さ

大阪市 川口弘生

花外楼維新を偲ぶ同窓会

三面鏡で柔しい方の顔さがす

新入へ試験範囲のない社会

職人の妻で直線的に生き  
きりぎりすだったと悔やむ五十坂

岸和田市 高橋操子

沖繩にて(四句)

紅型を着た南国にある魅力

高層ビル獅子屋根の昔にふれたくて

姫百合の塔は無言で語りかけ

花束をささげる塔へ湧く涙

サンガラスのうそ見抜いてるサンガラス

堺市 高橋 千万子

洋ラン一鉢背のびした私

感違いさせた女の憎い笑み

ギター上達エリートコースそれた音

未来図の中から外れている私

あらそえぬ血筋を鼻の線に見せ

八尾市 高橋 夕花

また失敗をしそうになった木の芽どき

まっ正直な女ときどき乱心する

ワンマンだとおもい頼もしいなと思う

夫婦の絵いつか無色になっている

折り曲げて折り曲げて母のころかな

大阪市 本間 満津子

十七文字みな自画像になる怖さ

陽の匂うふとんに今日を労わられ

親類が増え喜びが増え悩み増え

お悔みをすらすら弔問客代理

花散る宵ことば少なに老夫婦

大阪市 津守 柳伸

新緑を松喰虫があざ嗤う

情に差す竿は明治の浪花節

すっぱ抜く祝詞幼い日の善意

親よりもでかい子供の荷物持ち

月末のインターホンは笑わない

あ、無情ただ一本の宝くじ

運び屋だかつぎ屋だなどと母も老け

旅日記古都の雨音よみがえる

軽すぎる布団へすまぬ愚痴を云い

陽当りな最良施設の娯楽室

海ゆかば潜水艦にぶつつかり

天皇と同年なじ年でいて無職

リハビリの汗は故郷の土が吸う

泣かぬ女になってソロバンすぐはじく

スペースシャトル俺のローンは俺を追う

行革の総論だけは賛成し

スト中止結局仕事手につかず

一億の落し物もある日本

ほどほどに吹けば風もよるこぼれ

新妻がバスであくびの出しつづけ

噂だが噴火するそな金剛山

峰と峰やがて戦さは終るだろう

目をあけて山を見ている恐怖感

水枕欲しいと思う瀧の水

風呂敷の中で眠くて山の夢

富田林市 板尾 岳人

鳥取市 両川 洋々

仙台市 川村 映輝

奈良市 森田 カズエ

東大阪市 市場 没食子

学資保険もう掛けてます哺乳瓶

年寄の肌着も花の汗滲む

茶摘唄ひばりの恋を聞きながら

孤立無援軍資も既に先が見え

倉敷市 水粉 千翁

座布団をそうかそうかと敷いてくれ

悠々自適くらしの中の春霞

さくらんぼになろうねと花ほころびぬ

崩るるも王者のいのちかな牡丹

和歌山市 野村 太茂津

紙魚喰いの言葉ポツポツ竝んでる

分裂症は俺かも知れぬ字が竝び

不遜な言葉あらわに淋しい本音あり

たかぶりへ軽くいなして手馴づける

兵庫県 遠山 可住

単純な老いに嬉しい言葉聞く

石投げて海の広さに抱かれてる

郵便受の名を書き換えて春の恋

賽銭が底まで落ちてから拝み

藤井寺市 児島 与呂志

善人の炎は阿呆にされたまま

代々の女の意地で守る藏

学歴に対抗している背がまるい

気休めが嫌味に聞えて戸を閉める

鳥取市 小林 由多香

落選のポスター笑顔持ったまま

一浪へ母あたたかく父きびし

ライバルの浮いてる腰を見逃がさず

宝石の今日は魔性持つ光

大阪市 西森 花村

ソモサンと蠅が坐禅を試しに来

木偶人形悲しい時は眼をつむり

薬師寺の昭和の塔の春蘭けて

美術館窓の外にはリラの花

米子市 石垣 花子

別々に初老の夫婦バスを待ち

母の鈴胸にネオンの街に生き

首に鈴つけて名跡継がされる

すゝり泣く港へ半旗の船がつき

米子市 八木 千代

若き日の父の匂いを持つ港

温室で咲いて知らない風の愛

一目を置かれ長姉として疲れ

しゃぼん玉虹へ届かぬ夢でよし

京都市 都倉 求芽

予報より傘いるか母に聞く

知らぬ人だけが貫禄褒めている

日めくりの俚諺に逆らう日もあつて

とじ穴のひとつに末席仕立てられ

島根県 堀江 正朗

手さぐりで引いた自分の線を越え

疑問まだ解けず一つの音に座す  
肩の凝ることを知ってて曲げられぬ  
貧乏性か遊べば痛む腰を持ち

鳥取県

清水一保

すつきりと忘れてきれいな空の青

他所様の娘御だった妻の春

鉢巻をすればなるからする決意

貴方とはキャンセルできぬ夫婦です

松江市

柳楽鶴丸

ロボットのポケットでベルが鳴る

馬鹿馬鹿と阿呆が云う

花時計が指している鳥曇

人の都合など考えぬ九官鳥

松江市

小林孤呂二

七人の敵の鼻すじみなどおり

合言葉とつくに忘れている熟年

一縷の望みは消さず酒を抱く

二対一子は鎧になどならず

倉吉市

奥谷弘朗

一線を引いて譲らぬ几帳面

土壇場に来て根性がものをいう

政治不信ヤングは山が好きと云う

ハイハイとあしらうだけで妥協せず

西宮市

藤村メ女

運命に勝てよと祈る千羽鶴

振り向いた後姿はもう他人

今だから笑って云える離婚談  
割り切った過去で別れの握手する

兵庫県

河原みのる

根回しが過ぎて分担背負い込み

死屍累々私の木魂が化けそうな

ツンボウへ始めっから腹立てた声

血液型知らない侏で終りたし

鳥取県

川崎秋女

水色に替えよう戸外は五月の陽

ゴメンナサイがスラリと言える妻でよし

老漁夫がひとり港の昼下り

裏口を知らぬ男の眞一文字

米子市

林瑞枝

疲れても涸らさぬ愛で座を護り

裕次郎へ真珠の涙も平和です

一步下がりたい想い出美しく匂う

愛と云う傘寄り添うて子の門出

京都市

山本桐下

鉛筆で書こう欺されても消せる

母さんの余生に映えるタスキの朱

ふるさとが気になる約束抱いている

生き方が此処にもあったつばめの巢

八尾市

宮西弥生

恋人とみどりの下にいる安堵

よろこびがほしいそんな時馬鹿になる

泣きごとを洩らした今日は長かった

マネキンのポーズ大胆になって夏

京都市 山本規不風

勝ちとつた自由に修羅が貌を出す

旅立ちへ母の糸切り歯がきれい

見すかしているよう易者の道しるべ

美辞麗句で町内の義理断られ

守口市 羽原静歩

勳章辞退椅子取りゲームも嫌いです

中流のピエロで朝の靴を履く

大安の眼鏡の底の喜びよ

ポックリ寺ポックリ死なぬ瞳に出会い

大阪市 柳原静香

母の日に母の心を取り戻す

聴えない哀しみはなし花時計

月さえも欠ける日があり耐え抜かん

負けて勝つ老いの坂道まだつづく

堺市 藤井一二三

高橋操子さん句碑建立五周年句会(三句)

石ぶみの善意に五月の葉が炎える

男まさり句会も端午の節句なり

女ありけりだんじり囃子に負けぬ顔

散り際の無念花ピラ下を向く

島根県 堀江芳子

夫は恋人腕組んで行く喫茶店

ヘリコプター見上げて逢うた昼の月

しあわせな人だと益共鳴し

詫びもせずお茶でけろりとして夫婦

下関市 国弘半休門

一筋に働き貫いて旭を拝む

苦闘した山の起伏にある歓喜

捨て犬に後を追われて連れ戻し

飼い犬に噛まれた傷は内輪にし

竹原市 森井菁居

空想の世界で妻が蝶になる

傷心へ故郷の山がまんまるい

流される気なら長閑な春の川

ちっぽけな決意を茶房でととのえる

宝塚市 傍島静馬

不治の友励ます嘘に気が重い

孫ほどのワイフにフロント不感症

マンションにつましくベルシヤと囲われる

押売へ隣の犬が吠えてくれ

松原市 玉置重人

地下街で道を問うてる浪花つ子

飼い主に少し似ているブルドック

もひとりの私が私に嘘をつく

言わねばならぬ重たい朝を出る無口

八尾市 大路美幸

酔うている父の背中にある一途

ふり向いた眼鏡喜劇を見てしまう

まっ先に仏間に座る里帰り

うっかりと父の寝顔は見えないよう

鳥取県 森田布堂

七七忌 六道銭の色も褪せ  
水色のコップに夏を疑わず  
展望台いま新緑を胸に吸う  
表情を変えぬパンダのご愛嬌

和歌山市 若宮武雄

満腹の虎のまなこは虎でない  
距離おいて因襲守る夫婦岩  
一と言の波紋に揺れる夜の枕  
非行とは大人の真似をしてるだけ

岡山市 川端柳子

うれしさを行き交う人に分けたい日  
ずっと居れぬばあちやんだから遇される  
ポンと出す大金節約には触れず  
栄光の過去の活字を見せたがり

大阪市 藤田頂留子

蝶は愛で蛾は嫌われの氏素性  
アーケード改装雨の昨日今日  
靴ぬいでしまったパンスト後前  
参らせてもらえる幸と老いの数珠

和歌山市 内芝登志代

五月晴れ淡いブラウス薫る夢  
善意の傘借りて良心問われる日  
虚栄心抱いて女が美しい  
乗りきれぬ波へ一波待ってみる

和歌山市 浦野和子

価値観の違い近くて遠い距離  
迷いから醒めてみどりの風薫る

翔んでいる女で古い町が好き  
落椿唯一すじに川に添う

奈良県 村上春巳

メーデーをあてこむタコ焼屋の臭い  
サンパツヤどんな話も乗ってくる  
指切りで確かとせしめる三輪車  
本当の顔は鏡の裏にある

高槻市 福田丁路

有難や顔に似合わぬ不動尊

麻生霞乃先生の死を悼む

御冥福祈り合せた手が震え  
嘘か真か半値に近いコマージュル  
信念を曲げず年寄落ちこぼれ

大阪市 神夏磯道子

絶対的がはずれた夫婦独楽  
小川のぞく素直なわたしと青い空  
手の届く範囲に子らの笑い声  
掌の中の宝が私を泣かせます

和歌山市 垂井千寿子

奈良方面への旅(二句)

愛憎は彼方 興福院の尼  
忍者宿ボケットマネーの隠しどこ  
えくぼからすらりと毒のある言葉  
希望は大きい程良いとは言い切れず

和歌山市 松原寿子

愛の瞳に明日を写して日記閉ず

桜貝おんなは夢を積み重ね

薫風へ黒髪を梳く日の期待

気がかりな心へ風は鳴るばかり

宇部市 平田実男

女らしうなつて行く娘にある不安

麻痺の子も目で蝶を追う花盛り

化粧する時ほど動かぬ仕事の手

母の日もやっぱり母が先に起き

島根県 西村早苗

親しさは手の冷たさにはふれず

見送るとやはり振りむく村ざかい

毒舌でよし友情の温きもつ

一合でねむる老父をいとおしむ

倉敷市 稲田豊作

嬰鑠の元氣頑固も亦健在

チャンス今 妻は石橋まだ叩く

足場踏み外して悪い夢が醒め

恙なく亀の歩巾で来た私

柏原市 大峠可動

傾斜したままで家計簿穴を掘る

仮面など持つまい迷わない為に

白髪染口マンチストの絵が消える

妻に服す安月給の舞台裏

大阪市 江城修史

母の日の妻に五月の陽があふれ  
だんらんの中心帰省の子が占める  
主義主張持たぬ男で話好き

めぐり逢いあやしきまでに血がさわぐ

出雲市 原 独仙

目に青葉耳に雲雀の編路笠

連休を隣りの奉仕と比較され

巨人優勢風呂場へ孫が告げに来る

点滴だ酸素だ延ばして苦しませ

神戸市 中村 ゆきを

午前五時老いらくの恋家を出る

旅の気易さ他人様に声をかけ

コップ酒男は城を夢見とり

年金を講釈して同窓会

大阪市 西川 善紫

オールドパワー口先きだけと見抜かれる

み仏に仕立ながら深い欲

我がまちに主のような地蔵様

公園の噴水虹まで添えてくれ

鳥取県 福田 保子

故郷のみどり負け犬抱いてくれ

袖織る指に宝石など要らぬ

花活けて別れの未練口にせず

ギャンブルを知ってヤングに汗が無い

松江市 梅本 登美也

教頭が法の力を借りにゆく

祝盃の底に敗者の貌が浮く  
平沢に法務大臣何代目

看護婦がうっかり病名口にする

和歌山市

福本英子

かと言つて電話無いのもつまらぬし

映像の母と恋人入れ替る

御詠歌が流れてボタン三分咲き

吊り橋の雨真中で強くなる

東大阪市

崎山美子

先人の詩が聞こえてくる遺跡

車庫に塾寺商魂のたくましさ

愛よりも重い前歴などは無い

夢えがく絵の具の数がたりぬまま

堺市

大道美乙女

吉日を待つ新しい荷の香り

ひとすじの灯求めて模さくする

その先が聞きたい銚子追加する

子も疲れ親も疲れた花の山

兵庫県

辻文平

あいまいな答が返つて来る夕陽

裸では勲章つけるとこがない

振り上げた拳の下の春景色

画いても画いても廻らない水車

米子市

小西雄々

愛情を伝えてくれる花をよる

家計簿の範囲でファミリーストラン

逃げ道の地図は見せない父の愛  
適量を越えたいびきと妻は知り

寝屋川市

柴田英壬子

退職近し

引き継ぎの世代の差にも気を遣い

そら豆を食べると裏切り者になる

悟らねば欲にきりきり舞いをする

単純な頭でピストルが撃てる

鳥取県

鈴木村諷子

雪の日に死にたし北の旅立ちに

ある日突然おたまじゃくしのいなくなり

子の自慢もつとさせたい父でした

墨染めの衣一着それでよし

神戸市

仲どんたく

ロッキングチェアの揺れて時を聞く

二度を着る女 女の眼を恐れ

抹香に花の香ませて堂の春

ポートピア鷗も下手物食いとなり

大阪市

室谷徹舟

健康な色気発散するジーパン

故郷へ六十越して賽をふる

三食を食べてぜいたく嫁の愚痴

玩具箱みたいな因縁もつ女

倉敷市

小幡里風

ポーナスが欲しいと古稀の妻が云う  
罪深い私を庇う編路笠

包丁の錆にトラブル叱られる  
父と子でボールで連休黄昏れる

京都市 松川杜的

高野山バスツアーに参加(二句)

県境は竹藪筈のうまい処

外濠へ古墳太古の色落とす

改札をはさんで女の長話

水すまはいいな春風に身を任せ

和歌山市 西山幸

花の修羅終りぬ芥子は芥子なりに

主のない時計の律義あわれとも

母の掌のなさけに飢えたにぎり飯

生きのびて明日の孤独にまた怯え

松原市 北野久子

お姑へ笑い葉を考える

そのつどに妻の恨みの言葉じり

気楽さは聴えぬ客と知ってくれ

泣きに来る友も私も音が無い

大阪市 清水健司

日溜りで犬と職人じゃれている

玉の汗職人運をつかめない

おみくじを読んで石段けつまずく

輪の中の大工謀叛を許されず

大阪市 北勝美

子供の日歩いておいしい握りめし

恐いから医者へ行くのは明日にする

四月から出勤早い新課長  
システムが変って五月の愚痴を聞き

三重県 坪田冬花

仕来りもあつさり変えた嫁の知恵

雨の日のかさが拾ってくれた恋

なにもかも知ってなんにも知らぬふり

赤ん坊が笑って高い電話料

貝塚市 行天千代

孫の写真ばあちゃん眼鏡拭き直し

五十回忌へ母の形見の帯をゆめ

もう七十まだ七十と生きて居り

賄賂とる悪代官が今も居る

生駒市 草深醉升

気の利いた嫁でと他人には褒めておき

孫叱る声に昼寝を起される

あらだきのこと煮えて老いの鍋

年寄りの出る幕でなし貝になる

八尾市 飯田悦郎

立ち呑みでころして帰る腹の虫

家庭ではときどき阿呆な耳になり

善人に戻ると恐い世間なり

ふだん着に替えると低い鼻になり

寝屋川市 江口度

針ねずみぐらいの軍備なら許す

男性のかけこみ寺が欲しくなる

それはすばらしい字で赤字伝票を切る

坐つたら居眠るくせに不眠症

出雲市

園山 多賀子

般若にもならねばならぬ面を持ち

絵に描いた魚に釣られる猫もいる

並木路放射線状に昏れて行く

脱皮した女のルーツは探るまい

三重県

川上 溪水

年老いて愛されるには金が必要

フィルムに残りへ晴着着せられる

倅せを守る小さな嘘もつき

ライバルへ私情を捨てていた拍手

富田林市

中村 優

熱唱の与作に亡父が首を出し

道行きへ易の灯りがムード盛り

切抜きの知恵に時効のある恐さ

一言が波紋となつた正義漢

岡山県

岩道 博友

車椅子団体で来てよくしゃべり

幸福な糸手繰り寄せからみつき

恍惚へ少し相談かけておき

片方のイヤリング落して終電車

姫路市

植村 客遊子

答弁の舌足らずさえ喰い下り

口紅の色の変化を見逃がさず

厄年の厄除祭で事故に合い

定年へ胃散飲みのみ頑張る気

籠脱けた小鳥に餌はついて来ず

堰切れば水は小躍りして奔り

戦場の渴きよ今朝も水拌む

天国の誓いへ片方死に損ね

樫原市

岩井 本蔭棒

不発弾抱いてはるばる左遷の地

ハンドルを握る因果はお茶を飲み

振り返る余裕もなくなる日銭追う

下駄箱の上で必死に咲いた花

島根県

大野 酔夢

鮎解禁腰までつかる竿の波

薪能終り平安の闇戻る

剪定の鋏を入れる鬼手仏心

無愛想が買気をそそる骨董屋

東大阪市

奥山 弥山人

春の叙勳決つていたのに早く逝き

ほどほどにそのほどほどがわかりかね

ほどほどにしてお帰りと靴磨き

老妻があれでプロレス好きと云い

島根県

太田 亀甲

みどりの風に狎れ過ぎている不安

夕やけに素朴を聞かそう花いちもんめ

福耳と小さい耳とみな他人

富田林市

岩田 美代

ファンファーレ駄馬には駄馬の血が騒ぎ

美称市 安平次 弘道

口癖を九官鳥が知っていた  
指一本単価の違う泣き笑い

東大阪市 森下愛論

親馬鹿の後悔みせる子の寝顔

上の子の古着ですくすくよく育ち  
もう酒なんか飲むもんかと二日酔

奈良市 宮口笛生

忙しくなった五月の金魚池

百姓も結構楽しいちご摘む

田に腰をおろせば西塔陽をはじく

諫早市 原田明春

あの方も御無沙汰ですと老いの愚痴

娘の恋を許す気になる俺の過去

童謡の月も科学が無茶にする

今治市 長野文庫

平均を過ぎてますます生きる欲

妥協したふりして柳妥協せず

合槌をうってセールス食い下がり

松江市 恒松叮紅

五月雨へ精根尽きた牡丹散る

すき透るように晴れてる日の無策

信仰と別に参道ゆくりユック

松江市 舟木与根一

公園の痴態嗚呼陸軍墓地の跡

脱ぎっぷりよい主役で落ち目なり

迂かつなり喪服の襟足見とれたら

平田市 久家代仕男  
推肥積む蚯蚓のざれごと聞きながら

五月晴礮の干場は烏賊を干し  
行々子耳に昼寝の夢枕

和泉市 西岡洛醉

明日からはよっしやよっしやで生きようか

菜食に主義変えるのも老いの坂

愚痴話す女の背中に居る孤独

島根県 小砂白汀

スポーツウエア着ても背骨の軋む音

蜘蛛の巣を払う役だけ持ちこまれ

食卓でシヨウジヨウバエが戯れる

柳井市 弘津柳慶

温室で四季の野菜を狂わせる

結婚を許して母の目がうるみ

肚の虫ぐつと押えてお酌する

唐津市 新岡回天子

梅干が欲しい在米旅の日日

どことなく貧富の差あり国境線

真珠湾見れば大きくない港

寝屋川市 宮尾あいき

通りすぎた春みちのくの旅で会い

松島めぐり芭蕉コースをかもめ舞う

すばらしや仙台市街青葉萌ゆ

松山市 谷真風

白鳥の卵ころがり春うらら

大空へ繋がれている鯉幟  
麦飯を食べたいぜいたく言っている

大田市

藤田 軒太楼

謙讓を美德と妻の処世術

和顔愛語額に似つかぬ無愛想

真似られてみれば笑えぬ変な癖

大阪市

河井 庸佑

身に余る言葉でていよくほり出され

左遷の地うまい魚が待っていた

その腕をこうたか仕事また増える

笠岡市

松本 忠三

伝言板暗号めいたのも混り

若草が雑草となりてこずらせ

お供えの餅を寺から頂戴し

東大阪市

斉藤 三十四

二人酒覚えてきたのに先取られ

七十才のファイト口先やかましい

面白いお方と女にみくびられ

大阪市

神田 秀峰

銀行も金貸す時は態度変え

せまい家坐る定位置動かない

区役所の窓あつちこつちへ動かせる

大阪市

横地 雅風

退社ベル待っていました大あくび

昇給日その夜は話題のある夫婦

暴走の店だと銀行知っている

竹原市

古谷 節夫

デッサンのままで自画像終えそうで

午後六時さてこれからをどう生きる

一本気亡父からもらい子に譲り

大阪市

欄 蘭

倅と言つて女は下を向き

天気予報たまに当れば傘持たず

目をつむる狡さへ老人慣れて佇ち

倉敷市

斎藤 通風

往復のハガキ意惰か圧力か

吉相印捺して帰つた借用書

野良犬に食を与えれば暴走す

東大阪市

竹中 綾珠

誤字脱字自分はしてない積りで居

忘れたい忘れたくない亡夫の事

前歴は言いたがらない立ち直り

姫路市

植村 客遊子

チャルメラの音ジャンケンで買ひに出る

ナイトターは勝つてるビール追加する

車椅子ばかりが来たポトピア

大阪市

黒田 真砂

風薫る街へ妬心を捨ててに出る

亡母の指輪すれば心にある安堵

雑草をぬく倅せもある休み

島根県

梅 みどり

スケッチする雑草へあげる花言葉

傷心の憩いうるおす詩がある  
真白なエブロン自我を主張する

島根県

錦織 文子

小田原へ伊豆へと旅へ若返る  
夫婦旅伴せの歩巾くずさない  
素足もう初夏を知ってる風の彩

島根県

榊原 秀子

杉山の杉の太さを子へ贈る  
女心捨てぬ六十路を梳る

島根県

大森 孝華

ほのぼのとピンポン会話へ血がたぎる  
ふる里のそぼくな人よ山つつじ  
善人の登る坂道風が押し

岡山市

時末 一灯

コンパクト女の怒り封じ込め  
魚らだちの日は神様を使いわけ  
草庵と思えば雑草風情あり

玉野市

小谷 仙山

年輪が調法がられ邪魔がられ  
どう言えれば分つてくれる蛙の子  
牡丹散つてしまえば蝶も横を向く

松江市

竹内 寿美

故郷を忘れ砂丘にラクダ付つ  
独り行く砂丘独りの音がする  
十指巻く指紋幸いとはいえず

鳥取市

有田 とし江

下心無い酒気持よく受ける  
株値上げ少少気分奢らせる  
風の日の港解放されて寝る

鳥取県

金川 満春

楽しさを水に求めて初夏を釣る  
旧道も子供の頃は広かった  
経験の豊かさ老いを丸く生き

鳥取市

岸本 無人

丸刈りの顔頼もしいユニホーム  
山南町議選に事務長引受ける  
久久の友に出合えた選挙戦  
盆栽の鉢も枯らした町議選

兵庫県

大江 秋月

老母に叱られたのもよろこびのひとつ  
愛の終着駅では金でもめ  
御主人に似てる犬です尾っぽ巻く

倉吉市

渡辺 苦句

人間を信じられぬ悲しさよ  
花輪挿して交番平和です  
大学へ入れて遊びを覚えさせ

倉敷市

藤井 春日

球審の身ぶりで癒る五十肩  
英字紙は立ちスポーツ紙席を奪る  
働いたメガネ受賞のころは消え

町田市

竹内 紫鏡

鳥取市

有田 とし江

金賞の額を残して子は巢立ち

雪国で風土を愛し孤を愛し

草萌えの日のロマンスを抱いて老い

大東市 土岐 トク子

明治神宮にて

息子の祈り何をか祈らむ母も又

うたたねの肩へぬくもり嫁の手で

嫁やさし息子も亦やさし母の日に

岸和田市 島崎 富志子

あてにした娘も忙しいスケージュール

そのあとを言わねばよかつた悔一つ

愛称で呼ばれ一瞬若くなる

岸和田市 清野 こう

およばれの帯へ隣のお手も借り

雨止んで開かぬままの迎え傘

生きている倅せ信じる人が居る

岸和田市 古野 ひで

散り急ぐ花とは見えぬ通り抜け

人の世は光と影の萬華鏡

陶工の道ひとすじの肩の線

岸和田市 原 さよ子

押入れの片づけ結局元のまま

ご近所のことには疎い共稼ぎ

初めての帯へ右向け左向け

岸和田市 福島 せつ子

手車ではたんを見せに母と行く

五つ六つお若く言うて齡を知る  
ふるさとに海・山・城あり心満つ

和歌山市 坂口 公子

とし寄りに触れば亡父在り亡母在り

夕映えが白い心を染めにくる

身勝手な男にたたぬバラのとげ

鳥取県 林 露杖

失職の日々に緑が眼に沁みる

嗜血の友を励ます語を選ぶ

居直つて終えば不如意切り抜ける

大阪府 天正 千梢

泣く時は北側の窓閉めておく

いくばくかためて笑顔忘れてる

平戸が咲いて羅漢さん深呼吸

島根県 木村 はじめ

建前も本音も同じ顔が言い

人の世の明暗知らず桜咲く

歩むより他に術なし茨道

姫路市 大原 葉香

シャッターを押しつ押されつ旅の顔

農機具を納める納屋の棟上がる

予想屋は他人事だから予想出来

出雲市 吉岡 きみえ

善人が打つ柏手は神が受け

風船に自我いっばいをふくらませ

わだかまりとけぬまま布とん深く寝る

肩書きがとれて気楽と佗しさと  
朝靄が晴れて池辺に竿の列  
感激が終つて孤独の人となり

出雲市 板垣夢酔

炎天の鰯は化石になりすます  
保護色でしばし出かたを待つとしよ

出雲市 石倉芙佐子

戸惑いも押すのにもいます蟻の列  
矢面の風は本心など言わぬ  
頑なに心を閉ざすかたつむり  
本当の味方は母の顔になる

大阪市 西出楓楽

初夏の風ファイトファイトと吹いてくる  
時の流れにたゆとう如く昼寝する  
台所磨き妻の座光らせる

岡山市 花田たけ志

旗色が悪くて母の背に廻り  
子の内緒大きくうなづく母の愛  
気に入らぬ手にも定規は狂えない

青森県 五十嵐操史

展示会隣の店は人の山  
此の儘でほって置けない世話が好き  
苦労した指の節節褒められる

河内長野市 井上喜酔

善人であるだけ余計に腹が立ち

お人好し後で苦しむ無駄使い  
お題目無私の境地を走つてる

米子市 菅井とも子

時差ボケの頬をくすぐるレイの花  
将棋盤はさんで父子溝をうめ  
核家族育児電話にしがみつき

米子市 青戸田鶴

なにもかも水色にして川流れ  
土曜日の伝言板に字が溢れ  
名物にあぐらをかいて売れ残り

米子市 雑賀美世

メロデーに乗せて捲る妻の朝  
突然に向う岸から来る波紋  
しきたりを破る勇気を子に貰い

岡山市 井上柳五郎

春の坂うかれた蛇かまた轢かれ  
婿養子変屈までも継いでくれ  
遺言でも書いておこうか級友が逝き

守口市 野呂右近

花追うて今日蜂に成る小旅行  
笑わすも泣かすも言葉怒らすも  
八十才義姉の乱れぬたたずまい

竹原市 時広一路

逆らつた風が帰りは押してくれ  
スケジュール狂いはじめた途中下車  
予報より半日早く傘を持ち

三代目の胡座父祖の苦をわろう  
意識した日から世間を狭くする  
向日葵の従順さ陽もほめる

羽咋市 三宅ろ亭  
兵庫県 藤後実男

墓参り母に歩幅の思いやり  
適当に妥協してから残る悔い  
義理埋めて一人淋しい酒となり

西宮市 野呂鶴汀

白黒をつけて平取左遷され  
金縁の眼鏡の奥で人を射る  
意を決めて女素直に酌を受け

枚方市 稲葉星斗

万福寺古説を聞けばホトトギス  
駆け足に犬まで一緒に走り出し  
世に疎い母を恋い

岡山県 直原七面山

喝采の無い辞職  
一本の道を見つけた日の凱歌  
雨男返上旧婚の旅晴れる

本田 恵二郎

爆笑のはてが涙を拭いている  
転勤の荷物が独身ですと云う  
片笑くぼ妖しい謎を秘めている

浜田 久米雄

お話の少ない人と対座する

まな板のリズムが夏になつて  
人間の血が流れてるありがたさ  
割竹を踏む効能をまた話し  
退屈な日もありやがて喜寿となる

正本水客

集まって来て雨垂れの気が変わる  
地を走るときに春風眼をさます  
ほどほどに夫婦の鎖のびている  
古雑誌売るとき散歩に出て了う  
水が痛がつている湖岸のコンクリート

尼 緑之助

夜のいくさペビーホテルをふりかえる  
病院の廊下にひびく死の使い  
四面楚歌残る味方は妻一人

悼 葭乃先生(二句)

大いなる才女浮世をそつとたつ  
近頃の句風はどうかと雲の峰

川村好郎

一応は譲らぬ老いの小さい意地  
うれしいじゃないか女箸を割ってくれ  
おばあちゃんと呼ばれ妻はふり向かず  
嘘ついた傷私だけに残り  
ちびりゆく命残りの夢をあきらめず

## 川柳 太平記 (38)

# 落書時代の農民たち

東野 大八

初代川柳の文芸性は、時の変遷の時代環境の推移変化によって、狂句にとつて変つたが石部金吉の五世川柳や、それを継承した六世続いて模範川柳の七世によって、川柳は「俳風狂句」「柳風狂句」の名を冠しつつ、文芸的独詠句を維持しながら、人間の理想性を失い、皮相的なくすぐりの笑いに命脈を保持しつつ完全に風刺性の体質を放棄してしまつたのである。五世から十三世までの川柳宗家の継承はかくして単なる狂句のバレ句に転落したが、このことは一面、安政期を彩り世に氾濫した落書時代のバイタリテイに由来する。六世立机の安政五年（一八五三）井伊大老が就任し、尊王攘夷の声を他所に外国との修交条約をとり交し、遂に桜田門外で横死する。

幕藩体制はこうして崩壊の一途をたどる。化政期のデカダンスは、庶民のマス・ヒステリア時代へと肩替りして、むしろ狂句は、その苛烈な庶民のバイタリテイの罵詈ざんぼうの陰に埋没する程の凋落を示した。ここで化政期の時点に還えし、幕末開化期の時代環境について、一応の回顧を試みてみよう。化政期（一八〇四～一八三〇）の時の將軍家斉は、側妾四十八人、生ませた子ども五十五人。家斉はこの子らを諸國の大名に豪華な費用をかけ、莫大な持参金を持たせた。ために幕府の保有金三百万両は、文化十三年には一挙に六十余万両に激減した。この埋め合わせに江戸町人に御用金調達を命じた。幕府の威信失墜はここに始まつた。

享保・寛政に続く天保の改革（一八四一）は、いずれも強大一途の町人階級の隠然たる経済力に対する弾圧を意味した。殊に天保の改革は、天保飢饉とそれによる一揆打こわしと大塩平八郎の乱、黒船出現の三年後に断行された。それだけに「足の裏までかきさがす」庶民の消費生活の抑圧への怨念が、凝り固り天変地異がこれに拍車をかけ、幕藩政体は崩壊の一途をたどり、明治維新の一大改革期へと急速な傾斜を深めるのである。

江戸時代を通じて最も悲惨な生活苦を味つたのは、全国の農民たちであつた。その搾取は○百姓は財の余らぬ様に不足なき様に○百姓は死なぬ様に生きぬように○胡麻と手拭の水とはよくしほるべきもの○百姓もまたかくの如し○農は納なり○百姓は井の如したまるほどに汲みとれ○百姓はただの年貢、用金の取立候ための者一の六戒をもつて、幕府はいかにして年貢をとりあげるか、いわばそれが農政の根本方針のすべてであつた。

化政期には將軍自ら、一將軍五十五人の多産の範を垂れながら、農村では公然と「間引き」と称する墮胎・子殺しが横行した。生後間もない赤ん坊を葦の束に裸でのせて川に流す水子は常識であつた。

武家の扶置米は米である。その米を確保するために年貢が要る。それ故に天変地異天候不順などは念頭になく、武家側はひたすら農民六税をふりかざす。こうした米作の豊凶をタネに、都市の米問屋の投機買占め価格設定の商法がまかり通る。その水運の米の拠点は大阪であり、富商蔵元が繁栄する。このため幕府は、その経済力減殺のため断行したのが改革政革であった。享保改革後はこのため大阪の繁栄は減殺され、江戸に移った。

幕府農政の一大危機は、天保の飢饉に端を発した。天保元年（一八三〇）から翌年にかけて大阪周辺で起った「お蔭参り」は、伊勢詣りを名目にした集団離村を意味し、天明飢饉に劣らぬ深刻なものだけに、お蔭参りの集団は、米問屋などの特権商人宅を襲い、打ちわし、代官本拠襲撃をやつてのける暴民と化し一揆の大集団は、諸藩の武装兵団まで追い払い、ついに徳川斉昭をして「愚民怖るべし」と慄い上らせるほどであった。

搾取疲弊していく農村を捨て離村し、地方都市、中央都市に農民ははりくぞくとして集結していく。そして賤業も厭わず細民化し、ついに江戸は、日本のゴミ捨て場ともいわれる百万都市にふくれ上る。幕府の「人払い」

「人返えし令」もヌカにクギの筈、全国の人間の頭数の八四％が農民だったのである。

明治維新がはじまる慶応六年、名古屋、江戸、上方で「え、じゃあないか」を口にして乱舞する細民しめて八百万人の頭上に神々の神符が吹雪のように舞った。このことは、たしかにかつての日の「お蔭参り」の再現に他ならぬ。

地方から江戸への出稼ぎ人を<sup>改訂</sup>椋鳥という。狂句もふくめて江戸雑俳の「化政俳諧」のただ一人の著名人は一茶だが彼も椋鳥だった。

一茶は北信濃柏原のしがない農民の子として生れ、三歳に母を失い継母と折合い悪く十五歳で江戸に出た。江戸っ子からノロマ、無骨さをこっぴどく罵られる大飯食いの信州出目の出稼人の一茶につきの句がある。

椋鳥と人にいはる、寒さ哉 一茶  
雪降れば椋鳥江戸へ食いに出る

（川柳信濃者）

一茶の姿に、われわれは江戸期農民の哀切さを見る。一茶は農民俳人の典型で、著名な彼の句は、金子兜太ではないが「川柳人」だし、筆者からいえば初代川柳の文芸川柳の再現だ、ということもいえる。

化政以後から幕末にかけ、山東京伝や滝沢

馬琴の読本。柳亭種彦の合本、鶴屋南北、河竹黙阿弥の歌舞伎、式亭三馬や十返舎一九の滑稽本、為永春水の人情本などは、強い虚無性に裏打ちされた因果性、怪奇性、猟奇性、戯画性は反道德性、反社会性のエロ、グロ、ナンセンスである。

化政期から幕末にかけ活躍した浮世絵師は挙げて最下層の町人階級であった。風俗・文化が頹廢爛熟した頃、彼等は「笑い絵」「まくら絵」と称する戯筆を弄したが、これを描かねば糊口を満すことができなかった。豊国や北齋、広重、国貞がいたが、天保改革には徹底的に弾圧された。ために隠号を用いたり相次ぐ改号で逃避したが、穏やかな風景画の広重は別として、豊国の血みどろの合巻物や北齋の仕掛本の枕絵などももつて他の人情本、春画として摘発された。しかし、やがて血しぶきたらけの幕末、明治期の芳年の力作をヒックに、明治初期には当局の弾圧に影を没し、ポンチ絵がそれにとつてかわる。

江戸期町人文化の華、浮世絵―それはひつきょう徳川幕府三百年の威信と権威とその因襲、封建性から逃避するがための象徴の彩管だったのである。

# 誹風柳多留廿六篇研究

(二丁)

鈴木 黄・石田晋一・南 得二  
小野真孝・本多正範・石田成佳  
大屋六郎・八木敬一・多田 光

故岡田 甫

## 29 濟度のうちで大日ハ木綿もの

鈴木||この句は前出の句と関連がある。

大日如来の化身、即ちお竹は非常に節約家であったので、着物も木綿ものを着ている。

この句の裏には普賢菩薩は江口の遊女となっていたから「ヒチリメン」のような、高価な着物を着ていると言うウガチのようはものがあると考えられる。

南||奉公人の衣類は木綿物とされ、木綿はその意味で下女の代名詞とされている。その対照に遊女は緋縮緬で表現される。

大日ハもめん普賢ハひちりめん

六七・10

石田成||佐久間某家のあつた大伝馬町は、木

綿問屋が多く軒を並べ、「木綿店」の俚俗地名まで生じたという。

本句の木綿ものには、木綿店の意も含まれるとおもいます。

多田||諸説賛。

岡田||同。

30 本膳にうまみを付けて国へたち

鈴木||「本膳」は本妻の異称。

句意は奥様方大勝利である。次の句にあるように、これにはおそらく国家老が大奮闘した事と思う。

誰かしらいちめて帰る国家老

六・20

国家老殿と浅黄をしめにくる

九・26

本多||国へたつたのは国家老。「うまみ」は

巧みな度合いを云い、ここではお妾をしりぞけることがうまくいった事である。礎稿賛。

多田||同。こ馳走の「うまみ」と結ぶ。

岡田||同。

31 玉のこしから引きおろす国家老

鈴木||川柳的に考えると、かたぶつで融通のきかないのが国家老。「玉のこしから引きおろす」となれば、殿様ご寵愛のお妾様。奥方の座をねらっているお妾様を、何かの理由をつけて首にするという事であろう。即ち奥方の地位を確認させるのである。

多田||賛。

岡田||同。

32 おくさまの方には入らぬ筆のさや

鈴木 主題目、「川柳吉原志」に記載されて  
いる。その右横には、待人の呪なりと聞く、  
と註をして次の句がある。「本妻は筆の鞘た  
く味知らず」とある。また、主題目の参照と  
して、「智月女の句に「筆の鞘焚いて待つ  
間の蚊やり哉」。

句意は、筆の鞘をたいて御主人の来るのを  
待つお妾さんは、随分と筆の鞘が必要であろ  
うが、本妻の奥様はそんな筆の鞘は必要では  
ない。

多田 贊 私ははじめはわからず「入らぬ」  
をそのまま取って、バレ句かとも思ったので  
すが、「入らぬ」が「要らぬ」かと思ひ、か  
つ資料に出ていた「筆のさやたいて待つ夜の  
蚊遣りかな」から礎解のように考えました。  
ただ、「入らぬ」をすぐ「要らぬ」としてし  
まってよいかどうか疑問が残ります。  
岡田 筆のサヤを焼くと待人がくる……とい  
う呪いを知りませんでした。「いる」は、や  
はり「要る」でしょう。

33 商人のよきまぬを着る御祭礼

鈴木 江戸の商人達は山王祭には、どんなに

無理しても派手に上等なものを着ておいわい  
をする、といった句。

石田 普 「商人のよき衣着」は、古今集仮名  
序の文句取り。

多田 「年中行事」にも古今集序と共に引用  
商人ばかりでなくみんなが「借金をいさぎよ  
くする祭前(三・五)というように、無理を  
しても着飾ったのであろう。

岡田 同。

34 御年貢のからで初音のつづみ出来

鈴木 「つづみ」は、鍋島家のワラ鼓。「わ  
すれのこり」に、「鍋島家は松かざりのうえ  
にワラにて鼓の胴をつくりてカザる。甚見事  
のものなり」とある。

お年貢の稲のワラで、鍋島家のワラ鼓の松  
カザりが出来る、という句意。

お年貢がすむと鼓を調べさせ 五七・一

多田 贊 これと佐竹の人節が有名。「門松  
の代りをもする秋田者」(四四・二)。

岡田 同。

35 今以網へ手を出す御ゑん日チ

鈴木 はっきりしない句。多分浅草の三社権  
現の御祭礼を詠んだ句かと思ふ。

三社権現は、浅草観音像を宮川戸で網した  
という三人の漁夫を祀つてある。この漁夫の  
網と「網の目から手が出る」を合せ考えて、  
三社様のご祭礼はひどく賑やかで、神前では  
方々から手が出るという事か。

南 「川柳から見た上野と浅草」に、「観音  
様を網にて掬ひ上げたことを利かせて、社前  
の履網へ羅つた御賽銭」とあり。つまり投げ  
られた賽銭が横に外れないように、社殿の左  
右に張られた網をいう。

多田 同。

岡田 小生は、六月十五日の山王祭の句と思  
つていました。この日から芝浦のスパシリの  
漁、解禁ですから。しかし故事から見ても、浅  
草三社祭の方が適切か。浅草の観音堂に、網  
が張つてあったか、絵がないか気を付けて下  
さい。浅草の三社祭とすれば、よく、ここは  
スリが横行、それを詠んだ句かも知れぬ。群  
集の眼の網の目をくぐって財布を抜く、ある  
いは年の市に大黒を盗むということか。

川柳塔柳箋

一冊 二百円

送料 二百四十円

— 同人吟 —

# 秀句鑑賞

— 前月号から —

若柳潮花

満月へ疑心暗鬼がなおつり

谷垣史好

アポロ以来私達の美しい月への夢がうばわれてしまった。月はいつ迄も昔語りの月であつて欲しい。

ガス自殺出前の鉢を置いたまま

黒川紫香

中七の出前の鉢に哀愁を覚える紫香君らしい句である。

じゃんけんで踏絵の順をきめました

香川酔々

踏絵とは考えたが、じゃんけんで負けた人は大変である。すべてが、じゃんけんできまつたら…。

テーブルを飾るきれいな盗聴器

高杉鬼遊

テーブルを飾る豪華な盛花の中にかくされた盗聴器、考えただけでも恐しくなる。

絵にならぬ姿で妻は爪を切り

中川滋雀

絵にならぬ姿とはどのような姿だろうか。私の句に、「女みな絵になる姿もっている」があるが、聞かない方がいいだろう。

面影を辿ると弥陀の眉あたり

八木千代

今は亡きひとの面影であろう。弥陀の眉あたりとは心の温まる思いがする。

春雨の中で木蓮座禪組む

都倉求芽

座禪組むとはよく見ている。真白な大輪の花を見ると誰しもがそう感じると思う。

雨の中に咲く木蓮の花の白はひとしとお美しい。

好き放題云える身分にいて悩み

中村ゆきを

好き放題に物が云える身分であるからこそ悩みである。出世をすればする程その悩みは大きいものである。一つ間違えば悲劇を生みかねない。

美しく老いてゆく日の彩を撰る

藤村メウ

女性でなくとも美しく歳を取りたいと人は願う。さて作者はそのためにどのような彩をえらばうとしているのか。

おごられるのは嫌だしおごる義理もなし

金井文秋

少し字あまりの感じもすが捨てがたい句でもある。何となくユーモアで、ちよっぴり大阪商人の心を覗いているように思える。

十代の非行遠巻きして騒ぎ

藤井明朗

遠巻きにしているのだろうか。最近のよきに学生の暴力がまかり通る時、教師も強くなれと云いたい。

寝たふりと知っているから独り言

堀江芳子

この独り言は相手に聞いて貰いたい独り言である。本当に寝てしまっていたら口はしないであろう。面と向って云えない言葉はこんな時に言うものかも知れない。

この独り言は相手に聞いて貰いたい独り言である。本当に寝てしまっていたら口はしないであろう。面と向って云えない言葉はこんな時に言うものかも知れない。

尊敬をします女の良い言葉

川崎秋女

男よけに一番いい言葉である。あたりさわりのないように。

横ビントくれた老師を囲む酒

久家代仕男

校内暴力のさげられる最近、心のすみまで洗われる思いがする。

庭つきに住んで乗りかえ乗りかえて

横地雅風

いまだ庭付きの家に住もうとすれば中心地から離れたかたいなかしかなし。乗りかえ乗りかえてと云ったところが面白い。

次に私の好きな句を拾ってみた。

毎つぶしてスタミナを持って余す

正本水客

ためらうてはおれぬ古木にも新芽

川村好郎

子遍路の遅れ勝なる鈴の音

西尾栗

かなしみの西より来れば西へ旅

橘高薫風

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

植村 客遊子

花束を受けて今日から姑となる

赤川 菊野

新郎新婦が花束を捧げるシーンは何回見てもよいものである。和式でも洋式であっても老いも若きも目頭が熱くなつて来る。そこへもつてきて自分の気持を強く表現していると思ふ。『姑となる』とあるから息子の結婚式であろう。尚、息子とも息子の嫁とも仲良く明るい家庭をと一大決心をした作者（姑）の気持がひしひしと読む者の胸を打つ。

他人顔してもめ事の外に居る

妹尾 春江

もめ事が出来た場合、自分も一緒になつて腹を立てて必要以上に話をこじらせている場合も出てくると云うのが私共であらう。作者は『外に居る』とあるから冷静な気持になつて、そのどちらにもとらわれず公平な判断をして立派に処理されるのであらう。他人顔してとあるが何も薄情な意味ではない。以上

のよくな訳であらうと思ふ。  
貯め込んだ女おとこを近付けず

竹内花代子

ギャンブルや宝くじでどんと貯め込んだのではありませんよ。『おとこ近付けず』は私の様な並の男では足許へも寄り付けぬ、しっかりとした女性で、堅実に貯えた男まさりの女即ち何々女史とか言われる女傑と云うか、そんな女性が連想される頼もしい句である。  
冬枯れの鉢へ母娘の水談議

松川 芳子

盆栽物は特に冬の間の水管理がむづかしい適当に水をやっておかないと根が枯れて仕舞つて春になつても花が咲くどころか木が枯れて仕舞つたと云う事がままある。或る冬の日南陽を受けた暖い処で親娘が仲良くそんな事を語らつてゐる。のどかな姿が目につぶ。  
点滴の滴りと睨めっこして個室

麻野 幽玄

個室だからまだでしようか、危篤状態をひとまず脱して、のんびりと点滴など見つめてゐる姿など浮んで来る。酸素テントの中で麻酔を利かされての点滴であれば付添の人も生きた気ではありませんが、個室とは云ふところまで来れば心にも余裕が出てきたと云つたところでしょう。

目の位置でおみくじ結ぶ老夫婦

政岡日枝子

嬉しいにつけ悲しいに付、神様ににお詣りして、おみくじを引く、大吉とでも出たものなら喜んで思い切り高い処に結んで帰つて来る

ものだが、老夫婦、目の高さに結んで神様に何べんも何べんもお札を言つて帰つて来たのでしょう。

幕の内好きなものから箸をつけ

中谷 利美

ハンバーガーだのステーキだの今時の若い人の食生活の変わりようも大変なもので、家庭でも油類でゴテゴテした物を食べさせざるに年寄二人が汽車の旅でなくとも、一寸花見にせんか。幕の内弁当の蓋を開けた時の気持が良く現れていてよい。

九回の裏の逆転期待せぬ

今村 夕路

下五の期待せぬとあるのは実は期待十分なのでしよう。ナイターを八回位であきらめたのに翌朝新聞を見て逆転勝にびっくり、朝のスポーツニュースのテレビの時間が待遠しいと云つたファンの気持がわかるだけに、素晴らしい句であると思ふ。

巢立ちさせ夫婦の膳に箸つかず

林 ひろ子

橋筋の春めく色へブーツぬぐ

宮川古都路

女一人歩く細道みつけとく

西村美佐女

入寮の息子に持たず風邪薬

中辻 千子

セーターの下にまぶしいもの二つ

大萬 豊

以上文句なく私の好きな句です。

# 水煙抄

## 正本水客選

松原市 本多洋子

校庭の桜がチャイムの音に散る  
振り向けば九官鳥が呼ぶのなり  
お噂はかねがねなどと闘志みせ  
好きな様になさいと云われる不自由さ  
燃え尽きるまで忠告は無駄のよう  
漬物がうまいと主人も年になり

旭川市 朝倉大柏

年寄りに頭を下げさせているみじめ  
また延びた寿命にあやかり飲んで  
電灯をつけるとうわが家城となる  
洩れる灯の幸せそうな春の雪  
善人の手では眠れぬ紙幣の束

豊中市 満仲きく子

羊羹に新茶 会話はいらぬ仲  
草笛を吹くひとときは素直なり

このままでよい 幸せを逃すまい  
板ばさみ しばらく様子をみることに  
前世の因縁とかの出会いです

今治市 矢野佳雲

出来不出来どうでも うちの子供なり  
夫婦ってなんだ草臥れ切っている  
ひたむきに生きて獣に異ならず  
塩水へ手足伸ばして寝るアサリ  
名士の死世の中変りなく動く

大阪市 津山刀水

とてもあかるい人間がいる部屋の中  
旅行から帰ると鳴っている時計  
ふるさとで行方不明の俺に遭う  
向い風優越感の子が走る  
終点で風がごころうさんと言う

高槻市 竹内花代子

雪洞と桜 私の影がない  
カメラにも花の匂いが写りそう  
染みかくす化粧でさえも忘れがち

華扇会より

お吉死ぬ下田は雪の降り止まず  
義太夫へ紙の吹雪の散る櫓

八尾市 高杉千歩

蕨 芹 年金夫婦の厨の灯

レシートをしまい女はユーターン  
そしてそしてと話し上手な野の仏

ひとつふたつは よいとこもあり反抗期

旧友へ声かけそびれて戒橋

西条市 片上明水

はつきりと筋が通った口答え  
指一本折る一年が長かった

うしろから見れば善人にも見える  
見本にはならぬが父を見ろと云う

抵抗もせず白旗も振らぬ主義

大阪市 鈴木節子

安らぎは届かぬとこにありそうで  
ちっぽけな幸せ拾う旅に出る

ため息をしたら余生が見えてくる  
洗濯機つまらぬ愚痴を消してくれ

漬物をどっさり漬けてまるくいる

京都市 松川芳子

気まぐれな母の早寝も気にかかり  
お誘いの電話か母の身ごしらえ

知らぬとは言わずとぼける術も知り  
池に鯉入れて我が家も春の庭

新緑へ蝶連れ舞うている平和

兵庫県 中田白李

くすり漬け薬を飲まぬ日の淋し

花の店四季を知らない花香る  
常連へ殺し文句は投げられぬ

勲章は神の授けた顔の皺  
戦傷の足で心齋橋歩く

尼崎市 奥山美智子

アイロンの蒸気暮しのおいする

笹の葉にちまきは願いくるんでる  
父の死でわたしの視野が開けてき

たわいない噂に風も笑い出し  
はたきがけ胸のほこりも払いたい

大洲市 米澤暁明

春風へ五月が待てぬ鯉のぼり

下宿かわっても本屋からつけが来る  
城という城は桜の観光地

帰郷まず霞む天守に迎えられ  
下宿転々住めば東京住めるとこ

島根県 東原福子

リフトよりつばめが低くとぶ高原

若い日もあつたとつくづく思うこと  
ためらわず若さが一気に坂上る  
汗にまで若葉が匂う新茶摘む  
黙然として半日を庭いじり

寢屋川市

稲葉好子

肩に手の温もりだけが残つてた  
今流に不一致だけですむ離婚  
酔いさめてお喋りは酒のせいにする  
盆おどり同じリズムが踊れない  
街の風頬にやさしく通り過ぎ

唐津市

桑原掬治

子わらびよ武士の情だ見逃そつ  
四季の花庭は狭いが鳥も来る  
芸術も人もお金で評価され  
デパートの妻は健脚時知らず  
下駄箱にならんでいるは靴ばかり

岡山県

池田半仙

環境は万点 鶯鳴いてくれ  
根廻しが効いて苦情が遠慮する  
僕の癖まるきり似てる子に呆れ  
春風に山は化粧が忙がしい  
切札を持つから度胸ともみられ

堺市

田辺哲寿

大物の名刺肩書入れてない  
飲まされて鉄砲玉に仕立てられ

焼けぐあい見に寄ってくる火事見舞  
満腹の狼なんて恐くない

鳥取市

森田熊生

もう少しほしい勇氣にビール抜く  
妻 僕を信じて花の水をやる  
反省をしている靴が重すぎる  
肩書がないから軽い靴がある

鳴門市

八木芳水

ふだん着に着替え平静取り戻し  
孫ふえる便りに母の若作り  
しまい風呂主婦の疲れを知つてほし  
褒められたとこで図にのるお人好し

米子市

寺沢みど里

雑念を吸い取るような空の青  
空の色すなおに染めて海も暮れ  
腕白へつけて置きたい鈴がある  
欲得もなく子育ての役を終え

島根県

藤原鈴江

野菊だけ残して雑草刈り取られ  
信心の有無はさておき鐘につき  
なんとなくほのぼのとしたり日が続き  
形見とは云わずに身辺整理する

尾鷲市

渡辺伊津志

笑い方少し違った義母と母  
怒りたくなる時年を繰ってみる

珍客へ目刺しの匂いまだ抜けず  
カラオケを持つ時は皆お人良し

羽曳野市 佐野白水

葛城山背負うが如く地藏立ち  
五月晴れ竹内街道西へ行く

鉢植えのネギでこと足る老夫婦  
申訳程度にサツキ花をつけ

名古屋市 鈴木可香

虹へ鎌かざして青い稲を刈る

天国が身近にあったハンモック  
書き物へ孫ちらちらと顔を出し

毒舌を自認 毒舌惜しまれる

西宮市 梶川佳丹子

ジョギングで老いの余白に虹をかけ  
駈け足で来ていた古希をふりかえる

空似でもよし思い出の影を追う  
今日あたり花も命か うす曇り

岐阜市 市川鱗魚

言い切つて男竹光ではおれず  
嫁ぐ娘に男の愛は手暗がり

憎しみに女はポストまで歩き  
壺の底だとは覚えぬ自己主張

青森市 工藤落子

私だけ喰べてるように子は瘦せて  
もう一度チャンスが欲しい五十代

亡母を追う夢を何度も何度も見  
母の忌を迎える髪を夜洗う

西宮市 朝山千世子

花の雨に客足途絶えて茶店ひま  
柏餅ひさびさ母娘語り合う

若葉冷えの庭にサツキが燃え盛る  
灘五郷 酪酒を誇る倉の古り

西宮市 杉浦婦美子

後手に閉めて思案が先を行く  
つつじの忌 牧人さんも遠くなり

来客のランクで変えた菓子の皿  
駆け足で仏に出会う遍路バス

米子市 桑原伊都

きれい好きな亡姑へわびつつ墓掃除  
いよいよの時に台詞が出て来ない

作戦の通り野心家顔を売り  
子育ての記憶うすらぐ頃に孫

鳥取県 和井観洋

確実に人生歳を取っていく  
勝つ気力失せて時間切れを待つ

それぞれの顔それぞれの持病もつ  
ウインドの初秋を見ていく炎天下

大阪市 西村芙佐女

平凡な主婦でジーンズはいてみる  
この街の機械の音を愛す父

風邪ひいて母が恋しい年じやない  
背の丸くなった夫の愛撫まつ

唐津市 仁部四郎

蹴った石不満の向きを知っている  
敵味方見分けるためにユニホーム  
俺の影俺の半端を写し出し  
飛び降りて死んだ生徒が打った釘

岡山県 松本元江

雨の音 心の底まで沁みてくる  
ひと言が冷たい風を巻き起こす  
水仙がささやくように庭で揺れ  
五月晴れ山むくむくと動き出す

名古屋市 越村枯梢

エアポート国際乞食もやってくる  
数え唄花は散るちる愚に還える  
運勢欄喧嘩に負けると書いてある  
割箸の折れて失意の中華そば

高知県 赤川菊野

ぬかみそも漬けて一人の灯をまもる  
海峡を越える女の土佐なまり  
底辺に居ても真実まげられぬ  
追憶の独楽を廻して孤に耐える

尼崎市 中谷利美

きっかけを待つだけ恋の射程距離  
食べものに好き嫌い出て治りかけ

マネキンを脱がせた柄が似合わない  
ひま人でなくば叶わぬ菊の出来

大阪市 橋元美恵

覗いてる春洋品店の飾り窓  
計算をしている男は避けていく  
二杯目のコーヒーつまらぬ事喋り  
淋しい日電話は私のくすり箱

唐津市 浜本義美

翔んでいる女は光る石が好き  
愚痴言いに生れてきたような男  
団体に少し遅れて二人連れ  
二十年一日の如くバスに乗り

島根県 松本はるみ

子を持たぬ姑一日所在なく  
犬でさえ顔色よんでまろく寝る  
切札を秘めたゆとりの楽しさよ  
裏までは知らぬ笑顔かそれでよし

岡山市 串田句味地

清貧に生きて夜明けの星仰ぐ  
齢の所為か人の主張の裏が見え  
瞳と瞳の合うた対話の語がぬくい  
でこぼこの生活へ定規あてて見る

米子市 田中亜弥

散り際にひときわ舞うた花の精  
子豚ちゃん頭揃えて乳により

身のとどく範囲で善を積み重ね  
割箸で物価話題に呑む屋台

羽曳野市

麻野幽玄

入院の夫へやつれをかくす紅

宿帳の一部屋帰らぬままに朝

用のないのも覗いてるマンホール

裏ばかり見ていたらしいのに気付き

交野市

山本テルミ

預かった日から鳴かない小鳥かこ

駆け足もマイペースです老いの坂

ママどこに居ても返事をしてくれる

松原市

佐藤藤子

気心が分らずベットをほめておく

故里は赤い夕日がある野原

人並と思えど母の老い悲し

高知県

山下登舟

一坪の庭にひねもす妻の趣味

茶摘みする野良へ呼びかけ鯉売る

いたどりの樋かけてあり岩清水

尾道市

八木秀水

その国の子供が見せる暗い影

やわらかな小雨に濡れて鯉のぼり

ローソクの炎がゆらぐ風の性

兵庫県

野々口ゆう也

夫婦の絵未完のまま飾ってる

頬杖が窓打つ雨の怒り聞く

レモンの輪 世相写した貌で浮く

岸和田市

雪本二三子

一年生机ばかりが大きくて

雨蛙生きてますよと動き出し

帯一つその人柄ができあがり

今治市

渡辺南奉

父の腕から娘が確実に遠くなる

騙されたお人好しです長所かも

よっぽどの事母さんが嘘をつく

和歌山市

細川稚代

百花繚乱 今日一日が疲れ切る

春雨へ思い出の傘折りたたむ

さし出した片手が宙に浮いている

浜田市

佐々木裕

逆らえば仮面に素顔入れ替る

靴の音影も疲れて引きずられ

古い二人ダブルベッドも広すぎる

高知県

松岡三吉

失礼をしますと妻が跨ぐなり

みの虫よお前一番果報者

いく山も越えると背が丸くなる

大阪市

杉本智慧子

忌明けの日薔薇に紫陽花に雨が降る

余分のもの見えなくなるまで見つめ画く

晴天の朝の雀はお喋りです

東海市

小山悠泉

妻病んで暮しのリズム狂い出し  
姫だるまに夫婦げんかを見つめられ  
母の日を我が家は母の音で明け

今治市 八塚 三五島

年寄りが寄れば薬の話する

一段落して誰となく酒になり

解く時を思えば結びようがあり

大阪市 白石 潔

訃報しきり何かせかれて梅雨晴れ間

還暦で視野せまかりきとおもひ知る

逝くときの言葉選るとは不遜かも

西宮市 朝山 いわゑ

しあわせな受胎の報に花を買う

道問えば庫目印に教えられ

駅までを駆け足で行く共稼ぎ

西宮市 三沢 隆子

新入生つれて久しい花の門

娘が病めば花の移りも駆けてすぎ

満ち足りて古米余っている倉庫

大阪市 吐田 公一

寝てみたが寝間の中まで腹が立ち

酔い出せば てにはは省く父の癖

逝った子の温みが背にこびりつき

泉佐野市 大工 静子

一寸来てアハハ アハハと五合呑み

昼寝の神へ大鈴ふりならず

椿落つ三百六十五日目の道

米子市 政岡 日枝子

安酒でダイナミックに酔うている

ママの声真似て鍵っ子メモを読み

正確に今日を送った手の汚れ

島根県 松本文子

娘は去った 子離れできぬ筈はない

片思いだったマニキュアを落とす

背かれてからの微笑はほろにがく

大阪市 鍛原 千里

投げ捨てた煙草に男のエゴを見る

沢庵を噛めば孤独の音がして

悲しみへ泣かないけれど貝になる

鳥取県 羽津川 公乃

新緑がさわさわ過疎で人を恋い

贅肉のついた細腰たしかめる

忍びよる老いに毅然と背を伸ばす

西宮市 三沢 幽香

八つ橋に傘かたむけて花菖蒲

他人からみればつまらぬ夢ひとつ

人見知りしない仔犬がお手くれる

大阪市 堀口 欣一

太陽がいっぱい飲みほす缶ビール

田舎バス一人降りれば一人乗り

おみくじも菊の御紋のすかし入り

兵庫県 森脇 和子

妥協した顔で内心別のこと  
母に似た道を歩んだ舞扇  
口笛を吹いて老妻席を立ち

寝屋川市

立床晴風

下駄履きで病後歩いた瘦せた音

砂遊び上り框で叱られる

鍵っ子を雪は淋しく遊ばせる

唐津市

田口虹汀

鬼瓦 城主の紋をそれぞれに

石段をとんとん斜にかけて見せ

筈の刺身がのぼる山の膳

島根県

岩田三和

新しい靴にあわせる古い足

一粒のめしつぶ追うてメダカ達

中道を歩く勇氣は一人のみ

兵庫県

円増貞子

他人から見れば長生き七十歳

女しかわからぬ嘘の味が味

亡き父によく似た気性孫に見る

青森県

岩淵一星

座布団の角を枕に疲れが出

母だけが箸のいるのをとるメニュー

熊本市

有働芳仙

仲のいい夫婦に見せる見栄もあり

年頃になると大人がずるく見え

鳥取県

加藤茶人

世の不幸ひとり背負った顔で飲み  
顔色を変えて善人なら怒る

大阪市

村上喜代美

夫婦箸 今日も事なく膳に置く

目の悪いことを忘れていた絵筆

唐津市

浜本久仁於

スト回避 台本裏から透けて見え

ジョギングで余生始まる朝を起き

大阪市

村島秀村

齢なりの速さで駆ける俄雨

駈け足の先頭に居る太い眉

大阪市

平井露芳

衣裳など要らぬ喫茶のファッションで

初対面 犬足元をかぎに来る

弘前市

田中叶

春の陽のかけら燃えないゴミ光る

工事あり臓腑を晒すアスファルト

島根県

岩佐富子

さりげない皮肉の中にある温み

ふりかえりふりかえりゆく一人旅

大阪市

大野武太

一厘の差を会計がねばってる

顔見せた友にすすめる玄米食

鳥取市

武田帆雀

保険屋のリストに載って攻められる

あなたこそ善人一周してもどり

青森県

大自然の匂を知らせてワラビ汁  
道化師のような顔して紅を引く

波 ただお

八戸市

生き様の違うヤングが馬鹿に見え  
辞めるのは負け犬になるだから耐え

島 田 昭 治

和歌山市

受話器置く音聞いてから受話器置く  
趣味のない夫へ捻子を巻いてみる

坂 部 紀 久 子

西宮市

泣き言はコップ酒との対話にし  
駄け足で人生終えた友もあり

山 田 喜 代 子

大阪市

ちまき笹とけば菖蒲に似た香り  
かゆいとこへ手がとどきすぎて核家族

向 井 し づ 子

和歌山県

指切りをきれいに忘れていた不覚  
雑音の中で拾った鈴の音

天 満 三 千 代

神戸市

滝壺の渦に聞かまく神の声  
もと唄は悲しい唄でありました

久 保 禎 三

岸和田市

春のバス ニコニコとして手話の人  
好き嫌い時の挨拶して別れ

吉 水 照 江

岡山市

ポスターの別嬪さんに見詰められ

原 田 凡 太 郎

蒼穹の下で芥子粒唾み合い

大和高田市

連休に留守番の役引き受ける  
警官に逆らう程に酔っている

岸 本 豊 平 次

西宮市

風薫る今日は嬉しい事ばかり  
大夕陽働いた日の満足感

妹 尾 春 江

鳥取県

波の音いつか暮しの中の音  
母の日が私の前を通り過ぎ

武 田 照 子

東大阪市

駄け足で過ぎた人生とも思う  
川沿いに昔を偲ぶ倉屋敷

坂 本 喜 洸

新宮市

石蹴れば石は転げて嗤うなり  
長患い妻と二人になりました

辻 は じ む

唐津市

どの顔も満足そうな花日和  
事件の鍵 正直者が持つて逝き

山 下 勝 一

大阪市

思うことずけずけ云える齢になり  
倉貸して女が生きた戦時中

岡 田 ふ み

大阪市

老夫婦子供のように犬をほめ  
遠い父母電話の声にほっとして

田 口 な り 子

島根県

星 野 侑 正

審議会はなから無視する構え見え  
息詰る沈黙続く娘の瞳

島根県

堀江百代

硝子戸をあければドラマの町明ける  
冬着から春着にかわる気持よき

倉吉市

今村夕路

遅刻してまず集中の眼を避ける  
美辞麗句やっぱり嘘が秘めてある

尼崎市

中辻千子

尖る言葉もその身になって許しとく  
顔の違うように思いも違々と母なだめ

橿原市

西本保夫

バカになる勇氣なかなか見習えず  
ここでなら同じ立場で物が言え

米子市

野坂なみ

嬉しい足も悲しい足も墓に向く  
退屈な話に乗って出番待つ

山口県

高崎喜一

神様は絵馬で何でも聞きなされる  
水溜り自分の顔をふんずける

兵庫県

山根左春

かけ足で通りすぎたよ二十代  
五月晴れわがもの顔の鯉のぼり

今治市

新居田胡頼子

家中の話題をさらう孫ができ  
新婚の幸せ弾む三面鏡

東大阪市 三宅哲夫  
春闘が何さと桜花レース湧く

泉佐野市

真崎浪速子

教え子も負けずに白髪増えている

島根県

中川幸一

糸切れた風 嬉しいか悲しいか

大阪市

山本炉斉

倉出しの品へ好事家の目がきつい

大阪市

林ひろ子

石楠花を見に来て人の波に会う

兵庫県

奥野テル

山深い里を都ときめて住み

奈良県

宮川古都路

行きずりにようお詣りの合ことば

熊本市

北川一進

ここまでと先着順に輪切りされ

河内長野市

糸谷春草

メーデーのデモに参加の車椅子

八尾市

山下みつる

父も子も働いていてなお赤字

新潟県

高野不二

小づかいを呉れるから好かれる父の酒

和泉市

岡井やすお

商学部やめて理工に変わります

唐津市

木塚素石

趣を訪ねて藤の下に座し

## 路郎を知らぬ路郎論

論といっても盲人巨象をなでるの類い  
路郎先生も苦笑されるかも知れない。

〈編集部〉

## 路郎と三太郎

## 香川 醉 々

三太郎は、自己の句集に「孤独地蔵」と名付け、路郎は、「旅人」と命名した。孤独地蔵いよいよひとり歩むべしの三太郎と、二階を降りてどこへ行く身ぞと川柳道を歩き出した路郎とは、言わず語らずのうち、お互いの心中を察し合った、いわば心友と言えるのであろう。東西離れて相遠く住み、目見える機会も少なかったであろうが、その心情は、路郎の著作を通して読みとることができる。

☆川上君はある意味に於て柳壇のツエツペリンであるかも知れない。思い出したように、瓢然として旅に流れてる。それでいて風景は嫌いだという。

☆仮りに「名人」という看板を持ち廻って川柳家の肩の肩のせて見て、据りもよく又持ちこたえ得る者を求めたとしたら、物ぐさで、しかも鬼才縦横、名作進出の川上君の肩へ落ちつくのではなからうか。

☆川上君は、あれでなかなかしみじみとした話をする。その話の底には友情が根を張っている。君の真実を観る力は凝って機智となり皮肉となって湧出するが、その友情は、それらの機智や皮肉の外殻に災され、眩惑されて他人の知るところとならないのだ。

(橘高薫風編・麻生路郎エッセイより)

岸本水府とは、こういかなかった。共に関西に住み、若年からの交誼があり、いわば親友(いいライバル的存在の意味を含めて)であり、互いに切磋琢磨の仲だったといえよう。これは関西柳壇の発展にとって佳いことだったのであるまいか。

酒とろりおもむろに世ははなれゆく 三太郎  
酒とろりとりとり大空のころか 路郎  
確かに二人とも酒仙と言えるところも相似している。

私の句はどちらかと云えば淋しい句が多い。私の性格がそうであり、私の歩んだ道が険しかったからであろう。要するに私は川柳によって人間愛を求めてやまなかったと路郎は言う。路郎は、本質的にロマンチストだった。句集旅人の小章(見出し)に、「李伯の末裔」とある。路郎は、唐代の詩人李白を愛した。李白、あざなを太白。杜甫と並び称される大詩人である。

李白という友あり遠きむかしにも 路 郎  
李白は、四川の人という。その詩は、彼の  
性格に似て、自由奔放で豪快、ロマンの香に  
満ちている。

月下にひとり飲む 李白(田中克巳訳)  
花のなかで一壺の酒を飲み  
ひとり飲んであいてはない。  
さかずきをあげて明月を迎え  
わたしとわたしの影とで三人になった。  
月はもとより酒がわからず

影はただわたしのからだについているだけ  
でもちよつと月と影とをつれて  
春季に乗じてたのしもう。  
わたしが歌えば月はいざよい  
わたしが舞うと影はふるえみだれる。  
醒めている時はともによろこびあい  
酔うたあとはそれそれ分かれ散る。  
いつまでも無情の交際をしよう  
はるかに天の川での再会を約束する。

李白を愛した路郎の気持が痛いほど理解で  
きるのではなからうか。路郎もまた李白の如  
く、豪快奔放であったと聞く。しかし、川柳  
道をひとり歩く旅人路郎は、また孤独だつた  
に違ひなかつた。

此道や行人なしに秋の暮と詠んだ芭蕉も、  
弟子にはめぐまれた詩人だったが、やはり先

達としての孤独さを感じさせる。路郎もまた  
山と河 人ひとりなき舞台なる  
と詠ねばならなかつたのである。

昭和四十年七月七日路郎は、遂に帰らない  
旅に出る。その魂は、遙か雲の峰へ登つてい  
つた。

一行詩これが私の墓だとは

たしかに、七月になると、この一行詩のよ  
うに雲の峰が聳え立つ。あれが路郎の墓なの  
だ。

三年後の四十三年十二月二十六日、心友三  
太郎も路郎のあとを追う。

すがるには、満身の力が要る。川柳にすが  
れ 川柳にすがられよ  
この三天郎単語を残して。(文中敬称略)

## タクトは今も雲の峰から

## 八木千代

路郎先生を私は識らない。私が川柳を始め  
た頃、すれ違つたように昇天してしまわれた。  
淡いながらも、私の胸に路郎像が画けるよう

になつたのは、川柳全集「麻生路郎」を読ま  
せて頂いてからである。

君見給えほうれん草が伸びている  
酒とろりとろり大空の心かも

妻や待たむ靴音を高めんか

自然界と愛とが一如になって響いてくる。

そのたびに新鮮で、いつも、みずみずしい感  
動に浸る。写真で見る風貌も、知的で、孤高  
で、印象深い。

改札を出るも先駆者たらんとす 葎 乃  
夕立は小気味よし君が叱咤も 〃

と奥様に詠ませた、激しい中に説得力のあ  
る風爽とした、それこそ小気味いい人生への  
姿勢。臃だつた映像は、しだいに濃くなつて  
くる。虚像に惑わされることが無いだけに、  
間接に視るということは、純粹な場合も多い  
と思われる。厳しく烈しく、深い情熱を傾け  
尽くして、育てられた門下生の方々の胸に生  
きる実像の一端を、覗けることもある。

恩師の死その夜眠むしとも眠むし 薫 風  
あの頃、もしも私が、路郎先生の薫陶を受  
けることがあつたとしたなら、私も、この句  
の通りだつたと思う。その後、悲しいことに  
出逢つたが、不思議に浮んでくる一句であ  
る。

雲の峰という手もありさらばさらばです

命の灯が尽きようとする期に、万感溢れるこの辞世。自分を慕い続けてくれるであろう人達へ残す、終止符のない愛。距離を置いて見てさえ、流れ合い通い合う不変の心情は、羨ましいとさえ思う。美しくて偉大で、素晴らしいメロデーである。路郎先生の像は、音まで響かすようになってきた。自分の一句を欲しいと思う私。そのためにも、雲の峰から今も振り続けていられる麻生路郎の透明なタクトから、眼を離すことは許されなと思う日々である。

## 孫弟子

### 高杉 鬼遊

この特集欄に私が居ることを意外に思われる方もおられると思うが、麻生路郎師が亡くなられたのは昭和四十年七月七日であり、私が川村好郎先生から川柳の手ほどきを受けたのが、その翌年ぐらいたったので、約一年の空白がある。初めて川柳の専門誌を手にしたのは「川柳塔」になって一年後ぐらいたった

つたと覚える。その頃、路郎師を知らぬ者は珍しく、十六年余り経った今となってみればそれほどでもないが、折にふれて路郎師の思い出話を数多く耳にした。

俺に似よ俺に似るなと子と思ひ

古くとも僕には仁義礼智信

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

その頃聞いた代表句は巷間いまでも変わっていない。数年後、川村好郎先生から、路郎句集「旅人」を拝借し全句ノートした折に、

首つりは子を活動へやつておき

を読み、一瞬びっくりした。それは「夜逃げする畳の上を下駄で踏み」岸本水府氏の句と、時代背景や生活苦に共通な面を見せつけられたからだ。同じ悲惨であっても、水府句にはユーモアがあり、路郎句には救いのない底に子と思う親の心情が溢れ、深い感銘

をうけたのだった。

「旅人」のはしがきて、私の句は私の生活からにじみ出た句であるが、その句のすべてが、事実を根元として創作されたものであるかと云えば、必ずしもそうではない。しかし真実をつかむためには、及ぶかぎり心を砕いた。と作句姿勢を述べ、また、私の句はどちらかと云えば淋しい句が多い。私の性格がそうであり、私の歩んだ道が険しかったからであろう。要するに私は川柳によって人間愛を求めてやまなかった。とも述べている。

二階を降りてどこへ行く身ぞ

戯れに死ねばころやすからん

ああ日向五尺の影と知るも愛し

水溜り飛びそこねても一人かな

右の句に私はもつとも心をひかれるのである。その影のようにつきまとう孤独と潔癖性

は、人間の深淵を凝視し、自己に忠実なるが故にすべてに厳しく、哀しいまでに激しいことだったと想像されるのである。この句にこそ路郎師の真実を見る思いがする。

歳月を経た今となって、うしろの方に消えてゆくのでなく、私の前方にだんだん大きく影濃ゆく立ちほだかる路郎師を見る思いは、「ああ短



ありし日の麻生路郎

かかったと思つ人生」路郎筆の扁額を朝晩目にするせいだらうか。今後私が、どのように変らうとも、路郎師は大きな存在にはかならない。

文中、路郎師としたのは

古稀はよし弟子に孫弟子ひまこ弟子の孫弟子だと自負しているからである。

## 熱き像

### 高橋夕花

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

路郎先生のことをと云えば、やっぱりこの句を冒頭におきたくありません。先生を、もっと深く知りたくて、句集「旅人」ならびに「麻生路郎 極高薫風編」のページを再度繰ったのです。そしたら句の語らいの中で、素晴らしい先生にお出会い出来て、私なりに一つの像を削り上げてみました。

その日ぐらしの軒に雀がこぼるるよ

幻の中に時計がなっている

秋さらり銀の襖のもののおもい

なんと繊細な神経とやさしき、そして孤独さに仄かな温もりさえ覚えてくるのです。

草の根よ 僕も鬮う草の根よ

行末はどうあろうとも火の如し

六十一 まだ情熱は燃えに燃え

この情熱が先生の本来のお姿なのでしょう。あるときは情熱で理性を克服してしまっ強さが、今日の川柳塔に繋がってきたのだと思います。

凧あがりきつて親子が口をきき

裸婦を押える紙の輝き

一行詩 これが私の墓だとは

生きとし生けるもの総て、川柳の中で一貫してこられた先生の、伝統も革新も超越した感覚の鋭さが、私達後進の道しるべとなつて下さいました。『麻生路郎』と云う像が、くつきりと川柳塔の証しとして不滅の光りを放っているのはまぎれもない事実です。

しがみつくほどのこの世でなかりけり

いつのほどにブックエンドに似てわれも

雲の峰という手もありさらばさらばです

そして淡々と辞世の句を残された先生の熱き像が、今、私の心にしっかりと刻まれています。

川柳塔のご先祖、路郎先生を仰ぎ、塔の発展を祈りながら、借越なペンを置きます。

## 酔中朦朧 路郎論

### 宮園射月芳

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

路郎はこの一句を生む為に生まれて来たのだとまで評価される句であるという。人は誰でも自負心と共に何よりも嫌いなものが自分の中にある事を知っている。そこでこの句の子を弟子と考えたらどうであろう。自分は「専門家なき社会は発達せず」として職業川柳人になった、けれども弟子達の中に俺の後を継いでプロとしてやって行ける者があるだらうか。やって行って欲しいけれどもそれは出来まい。何故なら本当の俺の事を知らないからだ、路郎はきっとそう思ったに違いない。そして川柳雑誌は40号で終刊になった。

路郎は人間に締め木を当てて絞ると色んな悪汗が出てその後には朗らかな脱俗した人間が残るのではなからうかと書いている。路郎自身、自分のいやらしい事も知っていたに違いない。薫風氏の云われたように野党派にあり

ながら地位肩書には弱かった。という事からも判るような気がする。職業として成り立つ為には経済力のあるお客が必要であり、そして肩書がなければ大体において人は信用してくれない。句が上手なだけではどうにもならないのである。

名も知らぬ山の起伏をうれしがり

奈良県室生村にあるこの句碑に出会った時に、これが川柳というものであるのか、と川柳とは世間を皮肉り、からかうものであると思っていた当時の私は感じた。けれども所詮人間は自分が一番可愛いのであり自分の中の安楽に籠りたいという願望がある事を思えばこれが最も正直で素直な所ではなからうか。路郎は全身で川柳と、いや人間と格闘していたけれども本当は痛烈に世の中を揶揄されていたのではなからうか。そうでなければ『魂魄この世に残って』とはなっても『雲の峰という手もありさらばさらばです』という気持ちにはなれなかったに違いない。私はこれでよかったらしくけれども諸君はこの世でもっともつと頑張りなさいよ、と最期の皮肉を云って天に昇られたのではなからうか、と酔中朦朧たる頭の中で私はそう思うのである。

ともあれ川柳との出会い、そして「寝転べば畳一じょうぶさぐのみ」という句を遺して

下さった路郎先生に感謝し、自分に正直になりたいと思っている。

## 遺訓に学び

### 甘えからの巣立ちを

松原 寿子

小学校六年の私が短歌に興味を持ち始め、道草をしている頃、川柳を知っていたならそんな想いがペン先をよぎる。

人は誰しも死の孤独を持ち、一面無意識の裡に周囲の連帯感の愛に生きている。

一行詩これが私の墓だとは

右の句を詠まれた路郎先生は、決して平凡な方ではなかったという。烈しい性格、厳しさの中に優しさがあり、父性愛ゆたかで、嬉しい時、悲しい時、お酒を好み川柳を生命の次に愛し続けた情熱家でもある。「六十一まだ情熱は燃えに燃え」には、無限の可能性をばらんだ生を魅せられる思いがする。

優れた詩人は、常に時代の先端に立ち、次の世代を予測するものでなければならぬという。詩人ではないが、職業川柳人を宣言さ

れた程の方である。当時、実感として詠まれた代表的な作品の中に、次の句がある。

俺に似よ俺に似るなと子を思い

健やかな成長を素直に喜ぶ作者。父としての「俺」の自覚と、血を分けた子をいとおしむ普遍的な愛の姿がある。

しかし、角度を変えて鑑賞するならば、後世へ続く門下生に対しての叫びも含まれているのではないかと解釈したい。なぜなら、伝統に振り向くことで、句の世界の沈滞を打開できるものではないからである。

したがって、伝統的な中で、甘えからの巣立ちへ、未開の鍵は、他のジャンルの導入をも認めざるを得ない所に付たされている事も過言ではないと思う。

今後、路郎先生が私の瞳や耳、胸に、そして周囲に、どのように展開してゆくかは、わからないが、作品は文化遺産であり、偉大な自画像として受け止めています。

なお紙面の都合上この稿を結ぶにあたり、川柳全集橋高薫風編「麻生路郎」や、普及版刊行会句集「旅人」等の作品から、すべてのエレメントを、頭脳というコンピューターにかけて、描き出した路郎像の一部分である事を銘記しておきたい。

# 愛染帖

## 橋高薫風選

倉敷市 水粉 千翁  
天と地とおとこへ五月旺んなり  
すずらんのはにかみにこそ匂うかな  
青森市 工藤 甲吉  
きょうもまた訣れの牡丹一つ散る  
月光へりんごの花の雪の如  
尼崎市 黒川 紫香  
幽霊が居るから此の上だと思ふ  
北国のカラスは浪の上を飛ぶ  
大阪市 清水 健司  
人柄を丸出しにする釘を打ち  
ラーメンを少し残してサヨウナラ  
大阪市 小出 智子  
ふる里の一本の樹を父とする  
合格をしたのか会釈してくれる  
和歌山市 西山 幸  
水別へ晩春の花散るばかり  
人の世の寒さに冷えてよめいて  
兵庫県 遠山 可住  
サイダーにどよめきがある初夏の青  
手話の中の道はまっすぐ歩く道

島根県 小砂 白汀  
レモン切るナイフ絆は断ちがたし  
頤に滴る汗の澄むは何故  
大阪府 河野 君子  
保護色になつては答になりません  
女の一生に似たあじさいの彩寒い  
八尾市 高橋 夕花  
燦然と恋去りゆくに去りがたし  
危い橋に出会つてからのときめきよ  
町田市 竹内 紫鏑  
球審も遅れじと駆けネット前  
場外ホームー外野客裏がえる  
高槻市 田崎 あき子  
饒舌で別離の涙隠しおり  
ブラネタリウム少年の夢回り行く  
岡山市 川端 柳子  
水溜り昨日の憂さは消えてない  
同じ貌ばかりをみせて造花です  
島根県 榊原 秀子  
人間を笑う小さな棘刺さり  
遠く住む子ほど母の日大事がり  
島根県 木村 はじめ  
人生の問題集は売つてなし  
地下足袋をいたわる如く父は脱ぎ  
唐津市 仁部 四郎  
結び目をまた仲人に直される  
晩酌の二本め娘の許可が要る  
大阪府 神夏磯 道子  
解けかけた氷は見るまにとける  
今治市 矢野 佳雲  
百度踏む胸に落石流がある

浜田市 佐々木 裕  
通せんば勝負な顔が好きになり  
藤井寺市 児島 与呂志  
指摘した正論をあつさり多数決  
今治市 月原 宵明  
明日歩む道は緑であつて欲し  
米子市 八木 千代  
野仏へ願も小さい飯を盛り  
米子市 小西 雄々  
握り飯むかしの男は力持ち  
鳥取市 河村 日満  
さしかけてやる信心の肩が濡れ  
島根県 榊 みどり  
石蹴つてバックボーンにひびく音  
宝塚市 吉田 笑女  
植物の話なら合う老夫婦  
倉吉市 奥谷 弘朗  
新刊を飾つたままで足りる妻  
高知県 松岡 三吉  
さわやかな恋お茶清の店にくる  
大阪市 白石 潔  
山頂の日の出に男浄土みる  
松江市 舟木 与根一  
草書で打ち明け楷書で断られ  
鳥取市 両川 洋々  
恐山亡父の無念を母と聞く  
青森県 岩淵 一星  
煙草屋に朝寝をゆるし販売機  
今治市 越智 一水  
白い足女が出すよう渚かな  
豊中市 満仲 きく子

逆らわぬことにしてれば上機嫌

浜田市 中川 幸一

しらを切る白紙に消した跡残る

岡山県 池田 半仙

ほおえみの中に愛など入れてない

高知県 赤川 菊野

猿真似の同じモードが振り返り

高知県 山下 登舟

宅地化へ水争いも無き平和

堺市 高橋 千万子

見送ってこらえる顔へ振り向かれ

高槻市 若柳 潮花

枯すすき僕も昭和の落ちこぼれ

名古屋市 越村 枯梢

俺に似すぎている父のデスマスク

大阪市 朝倉 利義

ひよっとして孫は天才ピカソ展

兵庫県 辻 文平

子の為に大きくかぶる紙兜

米子市 雑賀 美世

折にふれ知恵を小出しに姑の箱

富田林市 岩田 美代

古さとや手まりも私もはずまない

高知市 西川 富恵

きさらけらと愛のかたちに夏はきぬ

大阪市 江城 修史

寡婦生きて心に四季の花を抱く

柏原市 大峠 可動

日本繁栄人すず成りのポートピア

唐津市 新岡 回天子

宝石に見えず奥さん品がない

高根県 堀江 正朗

国道を猛スピードで朝がくる

島根県 堀江 芳子

母の日へ造花もぬくいカーネーション

唐津市 浜本 義美

孫の守り結んで開く手の固さ

唐津市 山下 勝一

肩書の誇りが老いを孤独にし

和泉市 岡井 やすお

レッカー車首を振り振り坂降りる

羽曳野市 麻野 幽玄

何かを待つ事から始まる老いの日々

兵庫県 野々口 ゆう也

夫婦です斜めのままで回る独楽

倉敷市 藤井 春日

さくら散る吾が人生も風の中

尾鷲市 渡辺 伊津志

蟹が来て嘆く涅槃図出来上り

室戸市 岬 風子

大声をだせば口惜しき逃げそつて

八戸市 小泉 紫峰

ユーモアが皮肉に聞え落ぶれる

和歌山市 松原 寿子

ひたすらに一樹を辿る風の向き

堺市 大道 美乙女

五色豆四季折おりの彩に似る

鳥取市 武田 帆雀

世渡りの橋をゆすつて嫌われる

神戸市 久保 禎三

倦怠の夫婦も初夏の弾みくる

和歌山市 若宮 武雄

戦争の消耗品になる兵士

米子市 寺沢 みどり

幼子の推理ドラマの先を読み

和歌山市 福本 英子

正直な鏡へ斜めから向う

米子市 青戸 田鶴

熟年の恋水色のままで過ぎ

米子市 菅井 とも子

一言を添えて波紋を消して去に

米子市 野坂 なみ

同行の鈴で踏出す残り坂

大阪市 北 勝美

女関に色も匂いも鉢のリラ

東大阪市 市場 没食子

気の毒な余生過保護の孫の守

鳴門市 八木 芳水

呆けて来たとはやりきれぬことを聞く

八尾市 大路 美幸

いつか男はさい果て求めて北へ発つ

京都市 山本 規不風

思い出を持たぬピエロは星を見る

桜井市 谷口 梨郷

通り抜け花と人にとに酔わされる

富田林市 中村 優

自惚れて積木の悲鳴まだ知らず

寝屋川市 稲葉 好子

涙腺が少し変なのうちのママ

堺市 田辺 哲寿

ローソクの燃えてる間だけの愛

東大阪市 斉藤 三十四

堅物で定退したを誇りにし

寝屋川市 宮尾 あいき  
金魚鉢浮草だけが生き残り  
兵庫県 奥野 テル

亡母さんの手あかなつかし壺のつや  
大阪市 杉本 智慧子

新緑の風に私も翅が生え  
岸和田市 福島 せつ子

帯結ぶとこから人の手を借りる  
和泉市 西岡 洛酔

ブローチの蝶は女の真理かも  
大阪市 吐田 公一

研修の旅で味ないローマの灯  
大阪市 中西 兼治郎

親鳥の寝るところあるのつばめの巢  
大阪市 津山 刀水

一線の地平が視野にあり男  
鳥取県 羽津川 公乃

この辺でサイクル変える辞表書く  
西宮市 野呂 鶴汀

生と死と笑いと涙が人の世か  
米子市 田中 亜弥

吊橋をわたる勇気を妻がくれ  
旭川市 朝倉 大柏

金のあるうちの取巻きとは知らず  
米子市 桑原 伊都

重宝にされてる老母の知恵袋  
平田市 久家 代仕男

防衛と安俣いびつに走り出し  
青森県 五十嵐 操史

可も不可もない定退で好々爺  
青森市 工藤 落子

酒にくらべりややすいもの本と花  
松原市 本多 洋子

久しぶりで逢つたに主人や子の話  
兵庫県 中田 白李

体重は減らず裸のまま生きる  
笠岡市 木山 遠二

幕とれば句碑晴ばれと現れし  
東大阪市 竹中 綾珠

陽が照ると桜の花弁透き通る  
大阪市 小野 風童

働いた安全帽が揃っている  
出雲市 板垣 夢酔

愛情をなくして夫婦蟻地獄  
貝塚市 行天 千代

コマーシャルズー弁は聞きにくい  
岡山市 井上 柳五郎

噴水を眺めるベンチ日脚伸ぶ  
岸和田市 原 さよ子

同窓会語り明した山の宿  
尼崎市 奥山 美智子

四季を告げる花に心を教えられ  
河内長野市 井上 喜酔

特級酒俺の口には合わぬ酒  
西宮市 朝山 千世子

母の日に息子の酌ぐビール殊に美味  
八尾市 山下 みつる

夜桜は美人の姿通り抜け  
大阪市 向井 しづ子

頑張って咲いたつじに路地の雨  
大阪市 横地 雅風

晩酌をおれだけ苦勞の顔で飲み  
大阪市 横地 雅風

和歌山市 内芝 登志代  
名も知らぬ幼児相手に旅の窓  
唐津市 相葉 末雄

風少し出て鯉のぼり生き返り  
山口県 高崎 喜一

負けて勝つやっぱり勝つた方がよい  
岡山市 清水 金太郎

世の中に神ほど不公平なものはない  
兵庫県 円増 貞子

夜のしじま夫の知恵借り一句メモ  
岸和田市 島崎 富志子

八十年代突っばしる子が家に居り  
奈良県 宮川 古都路

礼所へ合掌で見送るバスガイド  
★ 豊中市中桜塚三丁目13-15  
橘高薫風(ハガキに3句)

投句先 千500

### NHK川柳募集

課題 「祭り」 選者 森中恵美子

締切 7月10日

(ハガキに三句以内)

投句先 大阪市東区馬場町6-4 NHK  
大阪放送局 老後をたのしく係  
発表 7月25日(土) ラジオ第一放送  
午前9時15分から

# 希望を沸かす21世紀の生活様式

▽神戸ポートピア見学記△

前 山 北 海

今回の訪日で、5月10日の神戸ポートピア博覧会見学こそ、最大な収穫であった。

81年の春、神戸の海に誕生した人工都市ポートピアランドに開会中の博覧会、愛称「ポートピア81」は、新しい、海の文化都市の創造をメインテーマとしたものであった。

会場は29のバビリオン、イベント会場、遊園地や外国館など、一日では廻れぬほど、充実した施設がぎっしり会場を埋めている。

大阪から乗物を取り継ぎ、会場に着いたのが午前8時47分、既に会場前の広場は、開場を待つ群集でぎっしり埋められて、入場券売場には長い二列が続いている。10分おくれの開場とともに観衆はどっと流れ込む。

新しい、海の文化都市「創造を標榜のテーマ・バビリオンから見学を始める。広い敷地には現代彫刻を置いた広場がある。ハイ・オース劇場に入る。未来の映像システムで画面の人間と対話映像つくりに参加、約25分の

「2001年の愛」を見て退場する。

関西電力未来エネルギー館は、21世紀の暮しを支える未来エネルギーを示している。エネルギーで描く未来都市大パノラマに会社のロボットが活躍。光と音の演出を楽しみ、原子炉内部の発火現象再現の光に感激して退出館外の風力発電機、愛称「順風一号」を見てハワイで既に実用化の風力電気を思い出す。

ソーラピラミッドの松下館に入り、エネルギー問題の解決策の電気の明日展示に、エレクトロニクス・パワーに希望の未来を感じた。ミニミ・カラテ館は、次代人間の住む海洋開発研究の紹介であり、フランス製の海中ハウスの展示にその未来を示唆していた。

グリーンエアドーム、芙蓉グルーブバビリオンは、自然のめぐみを示す、植物の力強さに人間が未来をかけた巨大な温室である。日本アイ・ビー・エム遺唐使館の実物大の遺唐使船に乗り、古人の冒険を偲んだ。

三菱未来館は、「海と人間の明日」をテーマとし、両者共存のイメージを表現するバビリオン。動く回廊に乗り、美しい大平洋、気象海象の子測、地震の子知と資源の宝庫展開を眺めて、両者共存のあり方を知った。

ポートピア水遊びのバビリオンは、太陽の下、親子と一緒に遊べる憩いの広場である。

サンヨーソーラリアムでは、次代のエネルギーとして最も期待される。過去から未来までの関わり合いを知った必見の展示である。

みどり館の展示は、いままさに潜航しようとする潜水艇をかたどったバビリオンで、潜水艇、海洋開発、海底洞窟と海の謎をストーリーとロケーションの5場面の展示が興味深い。

ウォーターランドは、水の博物館で、水を主役とした驚異の世界をつくり出したもの。滝のトンネル、水で動く作品、世界初のエレクトロ・フアンテンと酒と水の歴史を展示。造水促進センター「ポートオアシス」は、

「海洋都市の水資源」と「新しい海水の淡水化」をテーマにしたもの。海水から真水をつくる新技術公開が海水淡水化装置をバネル・ビデオ映写機で展開されるのを興味深く見た。たばこ塩のバビリオンでは、日本古来の喫煙具の蒐集とたばこ塩の製造実演がある。

川鉄地球館では、地球儀型ドームの座席の揺れる未来劇場で宇宙飛行をマルチスクリーンで楽しむことができた。

世界最大の70フィートの三倍、直径23メートルのドーム型スクリーンで、テーマの「家族そ

## 明治は遠く……

### 若本多久志

主治医から「少し暖かくなったら軽い散歩に出てみては……」と言われてからも久しい昨今、永く蓄のままであった福寿草もほころび始めたし、啓蟄も過ぎた日曜大丸デパートへの用件も兼ねて心齋橋へ出てみた。

近頃にならない暖かさで、さすがの人通りである。病後からステッキ無しでは心許ない散歩だから、少しよろめいた拍子に同行の人によつかりかかり、思わず「アッ失礼！」と声をかけたところ、ひらりとかわしたその中年紳士は、すかさず「ヤアーこちらこそ……」と言葉が返ってきた。老人と見ての敬察もあつたのだろうが私は急に胸の中にジーンと温かいものが湧いてくる思いだった。

まだ若い頃にもこうした場合が時々あつたが、「ご免！」とか「失礼！」とか声をかけても、知らん顔で行き過ぎる人が多く、中には洗面をつくつて睨み返す者さえ居たのに……

それにつけても思い出すのは、五、六年前ハワイのワイキキ通りで、店屋から急に飛び出してきた若い女が、軽く触れる程度だが私によつかった途端「エクスキューズ・ミー」とこやかに声をかけてくれたが、何ぶん外国のこと、知つてゐる苦の「You are welcome」が咄嗟に出なかつたのが、今でも残念であり、悔いの一つではずかしい。

#### いたわりの言葉に老いの眼がうるみ

我々、明治生れの者は、めまぐるしく移り変る世相を詠嘆して「明治は遠くなりけり」という言葉をよく口にする。ことほど左様に明治末期から大正初期の日本は何かにつけて、よき時代であつたと思つ、しかしこの言葉が俳人、中村草田男の秀作

#### 降る雪や明治は遠くなりけり

の短詩から生れたものだと思ふ人は案外少ないのではないか。

ろつて世界一周」を楽しめるのがダイエー「オムニマックススターシアター」で、神経ボールの型型スクリーンの大映像劇場が、直鋼ポートラマクドで映写してゐるのを觀賞した。

昼をマクドナルドのハンバーガーとコークで済まし、各バビリオンを覗き廻り、大阪ガス「ワンダーランド」のふしぎな鏡、現象と炎のコーナーを覗き、「ふしぎな旅行」を少しみ、外へ出ると午後4時を過ぎていた。

見残しが数カ所あるが、夕方までに大阪に帰らうと、異国情緒漂う異人館通りを抜けて南公園に入り、広いの観客のいないパンダ広場を通り、サイサイとロンロンが片隅に離れてゐるのを眺め、中国館に入り一巡した。

三宮行き電車に乗り、乗り物乗り継ぎ中津の東洋ホテルに帰つたのが午後5時過ぎ、一日会場を歩き廻つたポートピア見学を終る。石油時代に替る新エネルギー時代、21世紀のエネルギーとしてクローズアップされる太陽熱、風力その他の研究と実用化の数々をポートピアで見学してきた。

米国、ハワイでも代替エネルギーの研究と実用化は進められている。地下の火山熱、寒流と暖流の交錯利用の発電、来世紀不足を予想される火山岩盤で濾過された地下水の欠乏を補う塩水の淡水化などが思い浮んでくる。挽まぬ自然の研究と活用化による21世紀の人間生活がより豊かになる希望のふくらみを覚えるのであつた。

炎

工藤甲吉選

故郷すてた男の炎たよりの  
 再会に炎と燃えた過去を伏せ  
 落城の 炎の 中の 舞扇 登美也  
 悪魔にもなれる炎を抱いている  
 恋の炎に女体は赤く焼き爛れ  
 母の目がときに女として炎える  
 フラメンコ炎となつて床を蹴る  
 内陣の炎通して弥陀が揺れ  
 火炎ピン背なを冷たいもの走る  
 キャンプファイアヤングの血汐燃えさかり  
 炎え上がる女心が髪洗う  
 若者の 恋の 炎は 禦し 難し  
 なめつくす炎悪魔の舌に見え  
 陶工は炎の色に夢をかけ  
 水仕事炎になつた過去をもち  
 ローソクの炎へ馬鹿な虫もいる  
 陶工の炎見つめる目がきれい  
 面の下静かに炎もえている  
 炎える夜のペンヒローは旅に出る  
 ローソクの炎に愧じること多し  
 炎えた恋寝物語になつて  
 身を焦がす炎いつしか思慮を欠き  
 乗り替えてから中年の肌炎やし

柳五郎 叶  
 登美也 登美也  
 七面山 刀水  
 どんたく 女  
 佳雲 雲  
 カズエ 勝美  
 裕 哲夫  
 胡頼子 芳子  
 方大 与根一  
 弘朗 朗  
 みどり 可住  
 道子 重人  
 代仕男 義美

本 心

大峠可動選

千灯籠炎にゆらく石地藏  
 燃えつきた炎が老いをあざ笑い  
 炎え易い火は知らぬ間に消えていた  
 ローソクの 炎 静かに 新仏  
 松明をかざす 高き の 深い 闇  
 キャンドルの 炎 二人に 燃え つづく  
 炎上を けしかけて いる 奴も いる  
 炎 つかいて 見たい 日も ある ベンダント  
 言いつの る 妬心 炎 と 燃える 舌  
 髪梳けは 青き 炎 と なる 妬心  
 情炎の 軒で 風鈴 ひとり 言  
 炎えた 日の 日記 が 憎い 倦怠 期  
 コンパクト 炎 える 心 を かく せない  
 炎 えて いた 女 某 日 それ っ 切り  
 幻惑の 炎 が ゆらぐ 都市 砂 漠  
 炎には なら ない 思慕 を 抱いて 老い  
 熔 鉱 炉 天 の 貌 に なる 炎  
 地獄の 火 人 を 泣か せる 人 を 待ち  
 軸 悠 泉

実 勝一 虹汀 掬治 雀踊子 規不風 昭治 路子 大柏 宵明 本蔭棒 優 柳子 柳子 軒太楼 凡太郎 悠 泉

本心でしようねと女念を押す  
 本心が揺れる男の避雷針  
 本心は席立つ時の捨て台詞  
 算盤の上に本心乗せて見せ  
 手加減はぼちぼち本心はかす腹  
 一合も飲めば本心出る男  
 本心はともあれ女房ついて来る  
 本心を見せれば危ない今の地位  
 本心は言わない花の美しさ  
 本心を屋台の星が聞いている  
 本心を盗みぎきする聴診器  
 本心は真赤なバラに乗せてやる  
 愛犬が僕の本心嗅ぎ分ける  
 本心は吐かぬ男の胃が痛み  
 本心はゴロ寝をしたいブラカード  
 本心は流れの外に追いやられ  
 本心は別に持つてる電話口  
 本心が知らず知らずに愚痴に出る  
 突然に聞かれ本心うろたえる  
 本心をうちあけられた日の素顔  
 本心が思わず洩れたひと言  
 本心の差が違い本心計れない  
 お世辞たらたら其の本心に鬼が住み  
 本心を秘めて邪険な口をきく  
 本心をかくした傷がまだうずき  
 唄えない本心マイクは知っている  
 胸襟を開けば男の唄になり  
 カナヅチで本心すぐに碎かれる  
 本心を騙せぬ男のかわく舌

登美也 多賀子 刀水 哲寿 女 凡太郎 素身郎 喜一 優 大柏 カズエ 勝美 洋々 洋々 勝美 一路 和子 裕 芳草 方大 満津子 花子 代仕男 洛醉 テル 久仁於 三和 雀踊子

倉

川端 柳子 選

本心を言うには世間が狭ますぎる 三五島  
 口軽く見せ本心別に持ち 規不風  
 本心で中傷された日の失意 綾珠  
 本心へぐるぐる巻いてある虚栄 宵明  
 本心を打明ける目が動かない 本蔭椿  
 本心を小函に閉じた青春期 あき子  
 本心をペールでかくしている野心 春日  
 本心をかくす伏線派手にする 重人

本音ほそほそ口には出さぬ平家蟹 枯梢  
 本心を聞けば笑うてばかり居る 里風  
 本心は妥協をしたいた咳払い 悠泉  
 灰皿の向うの本心見えて来た はじめ  
 遺書という形で本心封をされ 柳子

本心がいま定年の愚痴になり 可住  
 本心は揺れたくはない藤の花 佳雲  
 本心を知った同士の円い膝 久仁於

没落を語る旧家の倉の壁 柳五郎  
 忠実を買われ役立つ倉庫番 春日  
 倉の戸が固く締まった過疎の村 一路  
 倉の壁いっそ哀れな左り前 与根一  
 偽善者の倉へきれいな嘘を詰め 洋々  
 武家倉の残りし町の城まつり 久仁於  
 夢二展勉強部屋が倉の中 忠夫  
 倉一つ残る先祖のおわず故郷 花子  
 格式の名残りどとめて並らぶ倉 はじめ  
 倉番は鍵を吊したまま将棋 宵明  
 倉一つつぶして飲んだ祖父の墓 実  
 焼け跡の倉で暮した過去をもつ 素身郎  
 訪れて旧家をしのぶ倉と堀 七面山  
 儲かりまへん儲かりまへんで倉を建て 武水  
 空っぽの倉を父から残される 文平  
 落はくの旧家に未練の倉ひとつ 掬治  
 道つける市政が城下の倉で揉め 日枝子  
 倉庫番元将校の髭が伸び 悠泉  
 その家の倉が知ってる浮き沈み 満津子  
 倉の荷が知ってる貸借対照表 どんたく  
 噂は倉にはなかった日の遺産 茶人  
 民具展こんなうちの倉にある 三五島  
 道問えば倉目印に教えられ いわえ  
 有り余る米が倉庫で年をとり 哲寿  
 倉出しの酒に目の無い父である 綾珠  
 法要の器は倉から出してくる ろ亭  
 冷泉家日本歴史を変ええる倉 木魚  
 こらしめる倉の戸少し開けておく 優  
 倉一つめるので世代がちと狂い あき子  
 倉屋敷捨てた自由と街に住み 可住  
 倉守る老母昔のことにふれ 可住

城下町倉から小判出た話 春草  
 倉のある家へ嫁いで苦が絶えぬ ふみ  
 倉の中千両箱がありそうなる 道子  
 倉らかにお倉に戻つて引く 喜代子  
 倉の鍵次男が背負うくじを引く 多賀子  
 みこし倉みのりの秋の晴れ姿 古都路  
 ねずみ小僧が出そうな倉に細い月 露子  
 倉のない気軽さ裸で嫁にやり 公一  
 闇の夜は忍者出そうな倉の堀 芳子  
 倉敷の蔵はレンズの中に入れ 凡太郎

遠い日の夢はなやかな倉の紋 女  
 トラブルを倉に詰めてる遺産分け 里風  
 白壁の土蔵に秘めている哀歌 枯梢  
 倉を出て灯り嬉しいお雛さま 芳子  
 倉のある家で育って落ちこぼれ 四郎

米倉の鼠で少し太りぎみ 雀踊子  
 童謡の倉懐しいこがね虫 幽香  
 倉の軒今年もつばめ初夏運ぶ 婦美子

お隣の倉と我が家の背くらべ

句帳 (ポケットサイズ)

一冊 百五十円

送料 (百七十円(二冊)二百四十円(三冊))

# 初歩教室

題 板ばさみ

本田恵二朗

日常生活の中に川柳を置いて、人生万象への感受性を養ったり、思索力を育てたりする手段にするなら、川柳はあなたの人生にとつて大きなプラスとなるにちがいない。

形而上とか心象とか或は観念とかの句も大いに佳しとする私であるが、自意識過剰に墮落することを警戒せぬと、とんだ恥さらしになるおそれがある。陳腐な内容を、魅力的な言葉や文字で飾ったに過ぎない句に出会うと、うらさびしくいる。派手な衣裳で着飾って、自己陶醉している図にどこか似ているよりに思えるからである。

板ばさみ米ソの谷間抜け出せず  
二つ来た恋の誘いの板ばさみ  
(両手に花実は困った板ばさみ)  
保証金受けると汚染される海  
犬猿の真中にいる身の置場

昭代  
同

(犬猿にはさまれ五体瘦せ細る)  
校長を立てて会長自腹切る

母と妻へカーネーションを二本買う

(板ばさみを逃げるカーネーション二本買う)

仲人が板ばさみになる夫婦げんか

(仲人を板ばさみした痴話げんか)

一人っ子親と彼女の板ばさみ

後手に板ばさみさす通勤車

(通勤車けさも後手に板ばさむ)

大臣を票と補助金が板ばさみ

組合と教委の中で校長はさまれる

(組合と教委とあつちが立たず板ばさみ)

こつち立てるとあつちが立たず板ばさみ

板ばさみ行司の活路見いだせぬ

(物言いがしばし軍配板ばさみ)

板ばさみ一番良いのは類かむり

(類かむりして板ばさみ通り抜け)

板ばさみ仲裁という役もあり

(仲裁という名の板ばさみになり)

母と妻養子はいづら板ばさみ

(母と妻にはさまれ養子べそをかき)

板ばさみ仕事か結婚かお好きなように

(サテ結婚をとるか仕事をとろうか)

板ばさみうっかり喋った自己嫌悪

(うっかりと舌がすべった板ばさみ)

処世術板ばさみになって覚え込み

(板ばさみになって覚えた処世術)

板ばさみなんとか抜ける道を選ぶ

芳水

同

古都路

茂子

同

梨郷

同

元江

同

やすお

同

茂美

同

千子

同

房子

同

岸和田市

吉水照江さんより

金一封

拝受致しました

川柳塔社

(抜け道を探しあぐねた板ばさみ)  
板ばさみ知恵の袋を老いが持ち

(老いの知恵借りてほぐした板ばさみ)

板ばさみされて悩んでいる愛よ

(板ばさみAとBとに言い寄られ)

ラッシュアワー痴漢と痴漢にはさまれる

(通勤車痴漢と痴漢にはさまれる)

子煩悩長女と末娘の板ばさみ

やき男母と女房の板ばさみ

(円満居士母と妻との板ばさみ)

板ばさみは嫌だと同居こぼれる

師と弟子の間で個性ゆれ合っている

(師弟間で個性がゆれ合いゆれ合って)

昇格の椅子が待ってた板ばさみ

熟年の名が耐えている板ばさみ

(板ばさみさすが熟年耐えている)

食い違う意見が母を板ばさみ

口出しの纏れに火がつき板ばさみ

(横口がもつれ誘った板ばさみ)

八方美人がたたった投票の板ばさみ

句味地

貞子

同

英子

同

とも子

同

ふみ

同

美智子

同



大 萬 川 柳

「駈 け 足」

入 選 発 表

選 者	川 村 好 郎
投 句 総 数	四 百 八 句
入 選	五 十 六 句

堺 千 万 子

定年が駈け足で来た日の焦り

駈け足で最後のわかれした吐息

堺 一 二 三  
駈け足で去る青春と気がつかず

駈け足でマイクをさける黒い霧

今 治 純 平  
声だけが駈け足してる老いの坂

駈け足が涙をのんだ発車ベル

富 田 花 梢  
兵 庫 午 郎  
待ちかねた春駈け足で通り抜け

駈け足で追いつ追われつきた夫婦

松 下 芳 枝  
兵 庫 茂 樹  
駈け足で時間ぎりぎり押すカード

駈け足で定年余勢は天下り

大 阪 善 紫  
大 阪 満 津 子  
駈け足へ赤信号の長いこと

駈け足駈け足とノルマ尻叩く

和 歌 山 武 雄  
西 宮 幽 香  
インク褪せてああ駈け足で去った日々

のっそりと来て駈け足で出るお金

八 尾 夕 花  
西 宮 佳 丹 子  
ジョギング老いの余白に虹をかけ

駈け足はすまいと誓う再起の日

堺 千 万 子  
奈 良 保 夫  
駈け足の帰社ポケットベルが鳴る

堺 千 万 子

駈け足の帰社ポケットベルが鳴る

豊 橋 貴 弘

ご先着さまのチラシへ欲が駈け

大 阪 君 子

駈け足の夫婦がかばう下り坂

弘 前 叶

ここからは駈け足故郷の橋が見え

大 阪 利 美

駈け足の昇格やつぱり袖の下

大 阪 智 子

駈け足をしても所詮かたむむり

鳥 取 露 杖

駈け足で逃げたい批判の座に辣む

和 歌 山 寿 子

駈け足の逢瀬の中で抱く余韻

大 阪 蘭

この足で駈けてもみたい車椅子

米 子 千 代

しあわせさんまた駈け足で過ぎてく

笠 岡 忠 三

駈け足へ発車時刻の無情なり

和 歌 山 英 子

花の春駈け足で追うバスツアー

松 江 与 根 一

女の子感駈け足になる夜道

大 阪 勝 美

駈け足で何を見て来たバスポート

八 尾 美 幸

会者定離駈け足で去る人もあり

大 阪 刀 水

駈け足もあつた青春遠くなり

橋 本 木 魚

駈け足でのぼるコネなど羨ます

旭 川 大 柏

駈け足の外遊それでもつらやまれ

今 治 胡 顔 子

駈け足で男戦う朝を出る

鳥 取 洋 々

駈け足で手形を落す日が迫り

大 阪 文 秋

朗報を伝える足が駈けている

大 阪 鎮 彦

駈け足で生きてきました母の讞

高 知 三 吉

駈け足の秋へ女は秋の柄

大 阪 柳 伸

駈け足の汗が邪心を振り払う

駈け足の老いを見つめているさつき

鳥 取 秋 女

駈け足の夫に合わず歩が軽い

駈けてゆく子等に合わせる歩がもつれ

和 歌 山 登 志 代

駈け足で射止めた椅子で勝負する

駈け足の親子の夢はまんまるい

交 野 テ ル ミ

駈け足もマイペースです老いの坂

リハビリで駈け足できたよろこびよ

米 子 み ど 里

駈け足で振り向くひまを持たぬ幸

米 子 み ど 里

駆け足で朝のリズムが追ってくる  
駆け足は出来ぬが亀は休まない

會數方大  
人ノ句

駆け足で追い抜いてゆく子の背丈  
駆け足の号令をこまで来た日本

枚方 弘  
地ノ句

百点が駆け足にするランドセル  
逢える日の駆け足風が妬いている

和歌山 寿子  
天ノ句

駆け足で沈む夕陽は振り向かず  
天ノ句

堺 一三三

駆け足の宿命を負う働き蜂  
九テルミ

西宮 千世子

駆け足人生 老いてなお翔ぶ蝶で  
八智子

西宮 春江

帰省子迎える母も駆け足で  
一〇登志代

高知 三吉

昭和五十六年度

川柳塔社常任理事会(6月4日)

〈出席者〉 栗・多久志・形水・水谷・紫香・

潮花・薫風・瓢太・柳宏子・与呂志・鬼遊・

岳人・史好

《議事並に報告事項》

☆中島生々庵理事長・主幹(病気のため、西

尾栗副理事長が職務を代行する。

なお水府忌番傘川柳句会の選者も主幹に代

り薫風氏が出席することとする。

☆薫風氏より小西無鬼氏(篠山)の逝去、葬

儀に栗、岳人両氏が参列した旨、報告。

☆同人規約一部改正の件、了承。

☆各部に副部長を置くこととし、次のとおり

決定。

同人部―多茂津、総務部―鬼遊・天笑、編

ベストテン(五月現在) 一四 満津子 五・五 大阪

一 一二三 一二・〇 堺 一五 道子 五・五 大阪

二 寿子 一一・〇 和歌山 以下略

三 花梢 一一・〇 富田林

四 君子 九・五 大阪

五 三吉 六・〇 高知

六 美幸 六・〇 八尾

七 千代 六・〇 米子

八 智子 六・〇 大阪

九 テルミ 六・〇 交野

一〇 登志代 六・〇 和歌山

一一 秋女 六・〇 鳥取

一二 柳伸 六・〇 大阪

一三 好一 六・〇 大阪

昭和五十六年度第八回

「特別」三句以内

締切 七月二十日

第九回

「ほどほど」三句以内

締切 八月二十日

投句先

〒593 堺市堀上緑町一―三三七

藤井二三方

大萬川柳会

ATLAS

PRUSS

高級洋菓子・レストラン

堺市役所前

TEL (21) 2334

# 柳界展覧

(原稿締切毎月末)  
集録・香川醉々

■村山夕帆氏の喜寿を祝して、要領で開催されるが左記の要領で開催大会の日時・56年7月5日AM10時場所・秋田県南秋田郡五城目町民センター兼題・選者

委●渡辺銀雨・揺れる●宮本紗光・汗●高橋放浪児・強気●齊藤涙光・弾む●菅原一字・美人●やぶうち三石・雑詠●佐藤正敏・雑詠●小谷源氏・喜び●村山夕帆

主催・川柳すずむし吟社

■小樽川柳社では55年度冬眠子賞として進藤一車氏の作品に決定した。

狐に還り夫婦氷雨を聴き分ける

■NHK川柳「老後をたのしく」は川村好郎、平賀紅寿両氏に交替して、橘高薫

風、森中恵美子氏になり、5月から放送中である。

■中村富二句集が既報のごとく発刊されるが、特製本7千円、普及版2千円である。送料500円。申込先は〒153東京都目黒区大崎1-6-13 701小野範子中村

■青森県川柳社代表中村瞭象氏は、このほど黒石市文化功労賞を受賞された。御同慶の至りである。

■第20回記念全伯川柳大会は9月6日AM8時からサンパウロ市で開催。

■「現代川柳百人一句集」が柳都川柳社より発刊。中島生々庵、橘高薫風両氏の作品が含まれている。

■川柳新京都社創立三周年記念川柳大会がいよいよ7月5日開催。

会場・ビル「葦光(二京都市中京区室町通、地下鉄御池下車)」兼題は次の如し。

部屋●前田夕起子・謎●橘高薫風・テーマ●田中好啓(人魚)●森中恵美子・正面●定金冬二・つなぐ●堀豊次・姉妹●選者未定・待つ●選者未定。締切11時30分

■たけはら川柳作品展が去る5月9・10日竹原市三井

会館で開催され、千名に近い鑑賞者にめぐまれ、大盛況であった。

■第1回とせせん賞として米子市の福島如風氏を受賞。ちなみに、氏は「たけはら」会員である。

実りなき糧が農夫の胃に溜る(如風)

■第13回東洋樹川柳賞贈呈川柳大会は各層柳人多数参加盛會裡に終る。(5月10日於神戸福祉センター)

■わかくさ35周年・龜山恭太句集出版記念大会も、柳人四百五十名の出席を見、大盛會であった。(5月17日、大成閣)

■ふあうすと六百号記念・紋太忌大会は、5月24日開催。二百二十名の柳人が出席、大盛會であった。なお55年度柳社賞として、ふあうすと賞に、ゆるませし少年のごと水ぬるむ(藤本静港子)・紋太賞に、わが日々の果てに錆びゆく父母の街(広川てる)と決定した。

▽同人・柳人消息△

■黒川紫香氏(尼崎市)群馬鹿沢温泉より旅信。

高原の風が冷たい鹿沢の湯

▼都倉求芽氏(京都市)足摺岬より旅信。

灯台は偉大船の灯海を這う

▼久家代仕男・堀江芳子両氏(島根県)の還暦祝賀川柳大会が、5月24日出雲センターで開催、大勢の柳人の祝福を受けられた。

▼中島生々庵主幹、5月26日守口市の関西西医大付属病院へ入院、目下加療中である。一日も早く快癒のほどを祈願。

▼菊沢小松園氏も大阪府大医学部付属病院へ入院。目下いろいろな検査を受けられている由。

▼小西無鬼氏(丹波篠山町)は、5月26日心臓衰弱のため逝去された。氏は、不朽洞会員であり、塔のため、大層ご尽力いただいた。

「川柳ささやま」の会長をなされたいたし、篠山きつての名士で著名な方である謹悼。

▽句会案内△

■菜の花句会  
時・7月10日(金)夕6時  
場所・西郷会館(八尾神社境内)近鉄大阪線八尾下車西南歩3分幸福相互銀行裏

兼題●本物(西尾菜)大阪風景(高杉鬼遊)姿(未定)廊下(未定)掴む(未定)  
連絡先―〒581八尾市中田2丁目302高杉鬼遊  
時・7月16日

■南海川柳部  
兼題●成績・逆転・割引  
連絡先―南海電鉄辻圭水  
時・7月20日(月)夕6時  
場所・阿倍野区松崎町大萬兼題●ななめ・半ば・ナウ  
仲よし・茄子  
連絡先―〒544生野区生野西1の5の2金井文秋

■東大阪川柳会  
時・7月25日(土)夕6時  
場所・東大阪中央公民館、近鉄永和駅前  
兼題●決め手・冷汗・実力告白  
連絡先―〒577東大阪市新池島町1の4の14斉藤三十四(TEL0729・0493)

■堺川柳会  
時・7月15日(水)夕6時  
場所・堺市民会館4F和室  
兼題●夏・流れ・刺す・石  
連絡先―〒593堺市堀上緑町2丁9の2河内天笑

# 本社 六月旬会

会場 金属会館

八日 午後六時

日中三〇度を越す暑さ。冷房の入らぬ会場はシャツ姿でも汗ばむほどである。司会の柳宏子氏から生々庵主幹、小松園氏の病状につき報告。生々庵主幹は人間ドックで精密検査を受けられ退院されたが、いましばらくリハビリテーションのため静養される。小松園氏は四日、七時間に及ぶ大手術をされたが、経過は良好とのこと。一日も早く、ご両氏に元氣なお顔を見せてもらいたいものである。

先ごろ逝去された小西無鬼氏（篠山町）のご冥福を祈り黙禱のあと、阿萬萬の氏のおはなしは。歴史のはなし。われわれが習った歴史の裏をのぞいてみたい、と神武天皇東征を中心に三、四世紀の古代史の断面を泉州に伝わる伝説などをまじえながら蘊蓄を披露される。

初出席は寢屋川の稲葉好子さん。

月間賞は前月につづき板尾岳人氏が獲得。

(史 好)

(受付) 与呂志・敏・重人

(進行) 柳宏子、記録(鬼遊)

出席 与呂志・勝美・滋雀・雅風・重人・喜醉・喜一郎・水客・規不風・桐下・千代三・英子・眉水・綾珠・史好・善紫・柳宏子・薫風・夕花・千寿子・禎三・文秋・寿美子・恭太・君子・翠光・潮花・瓢太・好子・右近・美幸・花村・勝晴・形水・ひろ子・岳人・度・射月芳・登志代・健司・憲祐・洋敏・栗・萬の・柳柚・柳伸・智子・頂留子・悦郎・雀踊子・茂子・あいき・鎮彦・英王子・好一・涼一・山久・吸江・鬼遊・弥生・川狂子・糸葉・寿子・敏・酔々・天笑・葉子。

## 席題「追加」

龜山恭太選

おしせを妻の機嫌が追加する  
幹事には内緒で酒が追加され  
雑兵に追加が廻ってこぬ銚子  
手土産の重さへ御辞儀の追加する  
食べ頃の茄子にお茶漬もう一杯  
追加する酒に男の四面楚歌  
へたくそなプランまたかという追加  
追加した酒からアラが見えはじめ  
まるい座に追加の酒がまだはずみ  
メンバーの追加追加で質が落ち  
追伸の長さ葉書を回ってる  
補乳びん飲んで豊かな胸も吸い  
アメリカの差し金子算追加  
奥の手は追加予算という政治  
ご指名が坐ると追加促される  
ウナキユウを追加勘定めめさせる  
とってつけたような追加で招かれる  
言わでもの言葉置いて靴を穿く

文秋  
与呂志  
雀踊子  
千寿子  
岳人  
雅風  
吸江  
与呂志  
洋敏  
千寿子  
千代三  
萬の  
寿美子  
洋敏  
涼一  
水客

子に持たすみやげの追加惜しまない  
追加分だけのりが無いにぎりめし  
定食の追加はすぐに持っていく  
追加した男が先に酔い潰す  
ここからは自前の銚子追加する  
追加した酒に女の顔が増え  
夜叉になる夜は余計に注がす酒  
魂の追加はないぞ汚されぬ  
幹事も追加のきかぬサイン出す  
ワソセツトだけで帰さぬ隙を見せ  
下請も嬉しい悲鳴の追加する  
記念品少し良いのを追加する  
それなりの顔焼増しの追加する  
茶碗むしの追加はひまがかります  
割り勘の追加あと味よく終る  
尺取り虫歩巾の追加したくなる  
顔を売る追加は自腹切っておく  
愛情の追加を控え目にねだる  
ピーク時の慌て一追加だけ残り  
もうひとつもう一枚の荷を飾る  
わり勘分下戸にはおでん追加する

## 席題「抜ける」

山本規不風選

手が抜けるころから氣遣う子の思春  
突き抜ける空の青さにはずむ夢  
二次会を抜けて裏切りのにざれ  
しつけ糸抜いて嬉しい母の指  
駆け抜ける新聞少年に朝の幸  
抜け捨の白に迷った過去があり  
抜け道はまだある母の熱い胸  
抜け道を絶たれ素直になる女

雅風  
重人  
洋敏  
与呂志  
重人  
吸江  
寿子  
寿子

桐下  
千代三  
英王子  
糸葉  
萬の  
悦郎  
潮花  
美幸  
滋雀  
重人  
柳宏子  
眉水  
潮花  
勝晴  
桐下  
鎮彦  
雀踊子  
美幸  
翠光  
重人  
恭太

目から鼻に抜けた女に隙があり  
骨抜きにされたうれしい赤い酒  
白い雲抜けたら亡母に逢えそつな  
小骨抜く位の腕はもっている  
抜け毛もつ氣にならぬ程禿けており  
抜け駈けの一人エリートかも知れぬ  
嵯峨野路の抜け道春が落ちていた  
幾人の指を抜けた出たダイヤかな  
抜けてると思つた妻の名演技  
空港を抜けると外サングラス  
二次会を抜ける嘘なら許される  
日から鼻へ抜けて自分の穴を掘る  
七転び八起き追い抜く夢捨てず  
娘嫁き臍抜けのよくな日が続き  
善人の眼をごまかして縄を抜け  
人形の首抜ける日がきつと来る  
抜けているように勘定間違わぬ  
握る掌の障間を抜けて落ちた秋  
家紋から抜けて人形になる女  
あつさりと抜ける竹光だから抜く  
抜群の出来を空しく聞く弔辞  
トンネルを抜けると白い闇が待ち  
因習を抜ける勇氣の嫁がくる  
抜けるのを待つから傷が深くなる  
火の言葉だいて紫煙の輪を抜ける  
裏道を抜けると毘がありそつで  
抜け殻にふりむきもせず蟬巢立つ  
ビール抜くその一本が導火線  
うらはらな笑顔で今日を切り抜ける  
一と言が多くて平を抜け出せず  
母さんの指抜きぬくしつけ糸

好子 憲祐 君祐 憲祐 瓢太 柳宏子 萬的 君子 寿美子 悦郎 勝美 水客 登志代 柳宏子 鎮彦 涼一 文秋 雀踊子 桐下 翠光 夕花 登志代 健司 健司 寿子 登志代 君子 英壬子 悦郎 桐下

ご冗談でしようと思つて男の手を抜ける  
小指のない男が抜けて来た筈  
ずば抜ける話術で時を忘れさせ  
縄とびを上手に抜ける母ゆずり  
兼題「太い」 津守柳伸選  
日本の夏へ太目の下着撰る  
これと言ひ取り柄は無いが太つ腹  
太つ腹の女将で男の友が居る  
水を呑んでも太る女が羨まし  
ぬかるみの女が笑う太い腕  
石ころを投げると太いのに当る  
結婚指輪抜くとな指が太くなる  
友悼む筆先太くなる祈り  
悪口雑言笑つて聞ける太つ腹  
山男太いザイルに血が通つ  
太つ腹な父でピエロにはなれぬ  
太くては役に立たない蜘蛛の糸  
何もかも包んで母の太つ腹  
太棹の糸へ津軽の波が鳴る  
短かくも太く生きたい来世は  
海千山千図太い男出世する  
神経の太さは社長になる資格  
出稼ぎの絆が太いもめん針  
さりげなく試し切りする太つ腹  
恵まれし太さ北は知らぬまま  
大根の白さ太さにある平和  
太い目を選つて目方で買わされる  
人間のよろこびを知る太い腕  
職人の誇りが太い指にある  
この人になら頼れます太い腕

滋雀 雀踊子 ひろ子 規不風 弘生 哲夫 弘生 史好 岳人 健司 形水 太茂津 憲祐 敏 雀踊子 射月芳 英子 潮花 柳柚 涼一 雅風 憲祐 寿子 重人 栗 鎮彦 洋敏 桐下

第13回 山陰川柳大会

日時 七月五日(日) 午前10時開場

会場 鳥取県東伯郡東伯町 東伯町中央公民館

(浦安駅下車、車で5分)

兼題 「道連れ」 黒川 紫香選

「作る」 藤村 女選

「歴史」 河村 日満選

「男」 尼 緑之助選

「ポケット」 清水 一保選

席題 二題(八木千代・本城快哉)

兼席題各二句・切12時

会費 一、二〇〇円(発表誌・軽食呈)

投句 七〇〇円(発表誌呈)

懇親会 会費 男二、〇〇〇円(予定) 女一、五〇〇円

賞 総合5位まで読売賞外

新人賞 総合3位まで

各題天位にそれぞれ呈賞

主催 東伯川柳会  
後援 読売新聞社・東伯町

板尾岳人金剛山五百回登頂記念句会

と き 昭和56年 7月26日(日) 11時開場  
 ところ 八尾市(八尾木)割烹 日本海  
 難波・鶴橋・上六より近鉄大阪線  
 にて八尾駅中央出口下車 恩智行  
 瓢簞山行バスで八尾木バス停前

題と選者 母 橘高 薰風選  
 祈り 三井 酔夢選  
 結ぶ 時実 新子選  
 足 森中恵 美子選  
 登る 定金 冬二選  
 自信 田中 好啓選  
 美人 西尾 葉選  
 無口 阿部 柳太選

席題 当日2題 各題3句吐  
 切り 1時30分

会費 1,000円 懇親宴 2,000円

主催 富柳会・後援 菜の花句会

きやしやな手で掘り出してゐる太い芋  
 骨太い指かたくなに土に生き  
 程々の図太さもあり頼られる  
 太い樹を切らねばならぬ父の職  
 線太く引いて自画像できあがる  
 血管の太さ注射器迷わさず  
 太い目の妻で安定感がある  
 奥の手と言う図太さを持つている  
 恋文を書くにはペンが太すぎる  
 村長が抱負を語る太い指  
 太い方でくくられていた猿くつわ  
 逆境で天をうらまぬ太い眉  
 太い声乱れ市場に朝が来る

美恭 射史 桐文 千水 岳  
 幸太 月好 下秋 寿客 人

六法を嚙じつて男太くなる  
 海に生き海を愛した太い声  
 太い腕信じ切つて丸木橋

兼題「体臭」  
 体臭がいつぱい匂う校舎です  
 長生きの父体臭はとうに枯れ  
 体臭が気になり出した倦怠期  
 亡妻の残り香に坐す夜のしじま  
 体臭を匂わず制服黒光り  
 安堵するほのかな体臭母の膝  
 汗匂う日銭数えるコップ酒  
 娘もう女の体臭持った距離

村田瓢太選

醉美 柳美 柳伸  
 幸辛 伸

乳呑み子の匂いに母の頼ゆるむ  
 前歴の体臭が花街はなれない  
 体臭が鼻についたら別れよう  
 赤ん坊の匂いは親を飽かせない  
 三人目の男の体臭にある虜  
 体臭をたしかめ合つて大の恋  
 体臭に汚れた父の作業服  
 縄張りを誇示する体臭だつてある  
 体臭がそのまま出ている十七字  
 男臭い匂い追い出しても残る  
 体臭も棟方志功である天女  
 嬰兒もつ母の体臭だとわかり  
 踊り子の体臭がするかぶりつき  
 新家庭体臭迄が甘さ持ち  
 乳の香の吾子よほのほの母の幸  
 夏まつり男の体臭汗となる  
 体臭が薄れて父の日向ぼこ  
 体臭を貧り合つて燃えている  
 なれている臭いで夫婦よく眠れ  
 満員電車みんな生きてくる匂いもつ  
 女史という体臭が響いてくるマイク  
 惚れてしまえば体臭あろうとなかろうと

兼題「来客」  
 若柳潮花選

来客の手前亭主をいばらせる  
 見舞客ふえ出し病人気が突り  
 珍客にされてすき間に眼が並び  
 碁の客と聞いて商談あきらめる  
 定退のそれから支関広くなり  
 来客へ逆さほうきのない洋間

英弥 弥生 健司 文秋 糸葉 悦郎 柳美 勝美 眉水 滋雀 頂留子 洋敏 ひろ子 千寿子 鎖彦 夕花 翠光 智子 度 滋雀 瓢太

静馬 千寿子 軒太楼 どんたく 茂子

来客へ汁のすくないうどん来る  
来客を見越し要領よくねだり  
たまの休日ドアホン休むひまがない

鬼遊  
柳宏子

裏の客といっしょに泣いて気が暗れる  
ビール券くれたと知らずお茶を出し

君子  
恭太

裸婦像の前で来客待たされる  
せいっぱい客をもてなす味を盛り

弥生  
鎮彦

みてくれのいい来客にごまかさ  
来客に裏から走る市場蔵

鎮彦  
度

ウサン臭い奴やとボチの鼻動く  
来客へ便乗しているパパの酒

重人  
あいき

招かざる客へも子等は喜々として  
来客のけたるさ雲が動かない

君子  
悦郎

来客の風呂敷子供狙ってる  
添え書きの名刺づかづか上りこみ

悦郎  
吸江

来客へ妻手作りのなすび漬  
借景を称える客へ開け放ち

吸江  
涼一

午前様又部下を連れ戸を叩く  
招かざる客が狂わす戸所

涼一  
射月芳

### 新同人紹介

赤川菊野

松岡三吉

川竹松風・薫風・鬼遊推薦

社長室総会屋が来刑事が来  
来客へ嘘を飾って女生き

寿美子  
悦郎

しぶちんの家しぶちんの客が来る  
来客を喜ぶ子等にある打算

眉水  
綾珠

来客へ時間をあけて日々多忙  
国賓が一息いれる奈良京都

綾珠  
憲祐

来客にコンニャクの味みてもらう  
招かざる客と知ってる脚を組む

憲祐  
水客

よく冷えたビールがあるに下戸の客  
来客にコーヒー社長は人參茶

水客  
英壬子

来客の背中に隠れて来たジョーカー  
オシッコの客へも動くエレベーター

英壬子  
糸葉

不意の客家中の餌食い荒し  
来客は誰はばからぬ河内弁

糸葉  
重人

#### 兼題「楽園」

#### 大坂形水選

楽園はこちらと書いたプラカード  
楽園は涅槃の花に埋もれる

勝晴  
涼一

楽園の地図はどの子が呉れるだろ  
楽園で鬼も気弱になつてくる

規不風  
夕花

楽園を夢見る父の破れ靴  
楽園が核の根城かも知れず

夕花  
射月芳

凡人の歩中に楽園遠く遠くなり  
楽園で拾うどんぐり手に余る

射月芳  
美幸

楽園の向こうがわにある仏  
楽園のはずの老人ホームを佻しがり

美幸  
柳伸

シンナーを吸う楽園は罪になる  
楽園の隅に地獄の道がつき

柳伸  
柳柚

楽園にバラの香りが降っている  
楽園へ好きなドレスを着てゆこう

柳柚  
静馬

### 川柳塔バツジ

男性用(ネジどめ)  
女性用(ピンどめ)

一個 一、〇〇〇円

(送料 二二〇円)

核の傘が要る楽園のうさぎ小屋

水客

楽園を探し求めて古稀はそこ

幸一

楽園のリズムに乗れず引返す

どんたく

パラダイス流がビールになつて落ち

千代三

路切を渡ると楽園見えてくる

健司

楽園を夢みて開く玉手箱

糸葉

楽園が雄琴の里にあるそうなの

射月芳

楽園に宮様が来るアドバールン

栗

楽園を肌で味わう白い杖

悦郎

楽園は花時計から朝がくる

糸葉

楽園の神話はきつと嘘である

弥生

楽園の噴水虹を呼んでいる

醉々

楽園を出て人間の顔になる

紫香

楽園に蓮の台が一つある

弘生

楽園が無いのにみんな坂のぼる

射月芳

一隅の小さい楽園温ためる

度

楽園をとりまく一等兵の墓

美幸

老人の足に楽園広すぎる

醉々

楽園へ好きなドレスを着てゆこう

花村

楽園へ好きなドレスを着てゆこう

岳人



■原稿用紙を使用。締切毎月末着使まで十七字以内の句に、下三マスに雅号。

(整理・香川醉々)

勝山双葉川柳会

河野 君子報

智子 節子 秋子 洋子 静子 芙佐女

新人が揃うとみどりの風がある  
お揃いで買物に来てもめている  
逃げられぬ証提揃えて押しまくり  
兄嫁へ母の重みを託しておく  
気をつかう身重の嫁の岩田帯  
口ほどに料理の味がさえて来ず  
口伝ての珍珠を訪ねてみたくなり  
何かある夫の無口が気にかかり  
ハンサムの前では何故か身構える  
ボクサムにするには惜しい男前  
往年のハンサムボーイも孫が出来  
冬枯れの野原で鴉餅をあさり  
子が画く野原は虹と花いっぱい  
寝転んだ野原でしかと土に会う  
陽と風と野原の子らは蝶になる

川柳高知

川竹 君報

ひろお 松風

松風 一三三

松風報

千鶴子 田鶴子

恒子 千子

妙子 喜代美

楓 久子

久子 芙佐女

いづこ 久子

久子 芙佐女

いづこ 久子

久子 芙佐女

いづこ 久子

久子 芙佐女

いづこ 久子

久子 芙佐女

デスマスク取って自分をたしかめる  
古里はどこも絵になる四季の彩  
嘘のない目尻のしわが笑いかけ  
春を待つ沈丁花にも傘を貸し  
独り身にまぶしく写る家族連れ  
みの虫の付ききたるままを床に活け  
誘われて孤独がついて行く喫茶  
嫁さんが来た隣へ声をかけ

南海電鉄川柳会

辻 圭水報

泉 小松園

千乃子 清女

清女 さよ

善紫 雅風

昌水 ミツエ

春蘭 さゆり

勝美 宏子

東雲 圭水

儀一 白梅

綾珠 清高

とし子 信江

いづ枝

時効でも世間はうるさい金のこと  
恩を知る犬で捨ててもさう戻り  
つまずいたとこで恩義を思い出し  
お返しを恩人の子につくして  
大恩があり無い袖をつらく振り  
体力が弱って恩に手を合わせ  
あれこれと思にきせられはなれ行く  
あの時の恩にせめての賀状書き  
アルバムの恩師の横の小さい僕  
いやがらせ頼ばかりして聞き流す  
恩は恩けじめはけじめと筋通し  
立ち直る恩の重さの幕語り  
恩返し今出来ること線香だけ  
いやがらせとつくに忘れて強う生き  
遠足へ天気予報のいやがらせ  
いやがらせしても可愛い児の仕草  
好きな娘にいやがらせするやんちゃっ子  
いやがらせ領海漁場の監視つき  
いさかいの子供可愛いいやがらせ  
千鳥足酔ったふりしていやがらせ

菊野 節 廣風 甲子 富久子 登舟 麗子 三吉 圭水報 泉 小松園 千乃子 清女 さよ 善紫 雅風 昌水 ミツエ 春蘭 さゆり 勝美 宏子 東雲 圭水 儀一 白梅 綾珠 清高 とし子 信江 いづ枝

いやがらせの通じぬ相手で尻尾まき  
岸和田川柳会 植山 武助報  
かたつむり小さい乍らも家がある  
あじつむりの葉に道をかくかたつむり  
腕白の子へかたつむり殻を閉じ  
孫が手を合せて拝す釈迦如来  
喜寿祝う髪ととのえる五月晴れ  
書道展深夜受賞のしらせ聞く  
ふるさとの空気がうまい春祭り  
どうにでもなれ時にはお供に見る  
贈る人ないカーネーションは妻のもの  
雑音の中にビーポーよく響き  
雑音でしかない明治生れのロック評  
雑音の中の陛下の声だった  
新入社甘え許さぬ棒グラフ  
一日の長さ徒食の身を責める  
新緑に私も少し化粧する  
寒い春庭の蕾が老いてゆく  
サングラスの嘘見抜いてるサングラス  
いくしま川柳会 黒川 紫香報

和重 善吉 せつ子 春栄 時雄 民治郎 希久志 加仙 浪速子 さよ子 武助 射月芳 甘平 白光子 ひで 富志子 操子 ハツエ 中石 保藏 唯夫 晴子 伊三郎 貞子 うた子 浩 かすみ 玲

老妻は昔の分まで寝坊する  
 刻刻とのぼる太陽の美しき  
 警報へ足が素直になつてくる  
 冬物を仕舞う心に影がさす  
 妻の目の高さにカレンダがある  
 順番に起き味噌汁の匂い嗅ぐ  
 離縁状もつて港で飲んでる

城北川柳会  
 しあわせな受胎の報に花を買う  
 十七文字みな目画像になる怖さ  
 あずかたの日から鳴かない小鳥籠  
 二杯目のコーヒーつまらぬ事喋り  
 八つ橋に傘かたむけて花菖蒲  
 姑の願いもいれて生むと決め  
 鶯の姿見えねど山の寺  
 娘持つ親のしんどさ晴着知る  
 恍惚は無の境界に生きている  
 順番に取れば茶碗も音立てず  
 空似でもよし思い出の影を追つ  
 肩書きが取れば気楽と佯しさと  
 逝つた子の温みが背にこびりつき  
 伸びるもの髭と爪だけ古稀近し  
 山つじきれいに咲いて人を呼ぶ  
 退院の日に鮮やかな樹樹の青  
 行楽地愚痴と恨みの花の雨  
 いい嫁と言われてのみこむ口答え  
 農産の歪み倉庫は余剰米  
 ジョギングの父子の背を押す初夏の風

川柳大阪  
 引き合いは何時も戦時の食糧難  
 陽炎をすかせば春の音が萌え

和子 まさき 美智子 玉子 郁栄 紫香 牧郎  
 弘生報  
 いわゑ 満津子 テルミ 美恵 幽香 婦美子 星斗 千子 喜洗 道子 佳丹子 弘一 公一 秀村 隆子 千世子 なりこ 三十四 近

夫婦して内職ささやかにいる傳年  
 青春のドラマやっばり甲子園  
 出直しのきかぬ余生を描く構図  
 負けられぬのに負け男死に飛した  
 パスポートないが国境鳥がたまふ  
 振り返る娘に青い鳥逃げたまま  
 月給日だけが素直な妻になり  
 尊敬の人なら素直になれる耳  
 素直さへ変屈者が負けてくる  
 素直さの他は子供に望むまい  
 採用が内定今日は小豆めし  
 ぶらぶらと歩けるほどの金持たず  
 悪友の無心片手で拌まれ道  
 レーガンが撃たれたテレビに魚焦げる  
 人生に逆らうつもりが無い早寝  
 負けられぬ一生北海道へ娘は嫁ぎ

京都塔の会  
 肉親の匂いを寄せて通夜更ける  
 カクテルのグラス片目ですかさず  
 無責任な答をくれる第三者  
 一目散に走って童心取りもどし  
 ご馳走を見廻しながら箸を割る  
 鉢植でレンゲ忘れず新芽ふく  
 菰を着て牡丹は春に逢うと云う  
 過ぎし日を語りつ母と雛飾る  
 太つてもやせても計りに乗つてみる  
 風雪に耐えて行くには華麗すぎ  
 繫がれた隣りの犬に吠えつたれ  
 高飛車に出て賑やかな別れする  
 定食の魚の切身が骨だらけ

雅果 秀峰 九平 天樹 六龍子 時子 道子 笑風 醉花 眉水 弘生 本蔭棒 君枝 与呂志 喜醉 杜的報 王石 明代 遊香 求芽 紫香 花代子 潮花 美穂 芳三 俊李 水客 三求

定食の一品すぐきがのる京都  
 ポートピアモナコ王妃が花をそえ  
 ポートピア平和な夢が有る未来  
 鏡見る恐怖ポートピアは未来  
 梅干を貼つて明治の顔で寝る  
 人生の坂目かくしのまま挑む

川柳塔まつえ  
 全国へわたしの歌が降りつづく  
 草むしる余生いたわる夫婦仲  
 浮き草の自由そんな日がほしい  
 踏まれたら雑草ひらき直る意地  
 青春の歌をリュックに山登る  
 雑草の可憐な花へ抜きしふる  
 草餅の香りに混る母の味  
 歌となり音痴こっそり座を抜ける  
 春風へ老いには老いの歌があり  
 女の座耐えて悲しい子守唄  
 雑草を茂らせ土地の値が上り  
 くり返す別れに揺れる島の唄  
 除草剤声なき雑草の悲鳴聞く  
 故郷に歌い継がれる歌がある  
 妻に内緒の電話番号だつてあり  
 拾われて一円玉がうれしがり  
 七人の敵の番号はみな奇数  
 そもそもは拾つた恋の夫婦仲  
 番号制反対再軍備に結びつけ  
 翔んでいる女が拾うはぐれ鳥

駒つなぎ川柳会  
 ああ女難酔つた仲居と踊らされ  
 人柄を夫の尻尾も知つている  
 裏口を知らぬ夫の定期券

杜的 弘三 白漢子 和友 誠史 佳丹子 町紅報 三和 みどり 早苗 みる 芳枝 伊都 愚郎 由郎 醉夢 敏雄 美世 千代 鉄花人 舞美子 舞吉 登美也 孤呂二 与根一 鶴丸 町紅 小路報 雀踊子 桐下

贅沢は出来ぬ生活が肩にある  
 ずるい手で儲けていても実力者  
 ひよつとこの面はずるさを許して  
 ずるいのが一人仲間の外にいる  
 秋風がよけい淋しいずるさ抱く  
 馳けつけて来たのにずるい目玉品  
 君が代に口だけ合わすことにする  
 どちらへもつかずええ顔するつもり  
 どちらへも味方の顔する蝙蝠で  
 生きるためずるい涙も流します  
 さつね程するくはないが憎い顔  
 信心にこつてる女のずるい顔  
 陽を背なのずるい武蔵を唾うまい  
 奥さんが怖い男にあるずるさ  
 すぐ消える虹を誰にも話さない  
 マンホールずるい男が隠れてる  
 ずるいとは思わぬ人の二枚舌

わかあゆ川柳会

小砂

四月馬鹿からかつて見る相手なし  
 ある予感無事検診に安堵する  
 手さぐりでたんすの底の古写真  
 手さぐりで飲める寝水が置いてあり  
 花鉢さくら剪ろうか梅切ろか  
 手さぐりの植木じりがみな枯らし  
 本音とは知らずに軽くあしらわれ  
 手さぐりで団地の吾が家探しあて  
 たそがれて私ひとりをとりに残し  
 風花の上から黄金の陽が透ける  
 風花の軽さよ明日を信じたい  
 葱坊主故郷恋うて伸びあがり  
 風花へ梅は他意なくほころびる

射月芳 柳 弥生 宏子 雅風 醉々 柳宏子 君子 天笑 三代三 美代 憲 智子 小松園 健司 柳伸 白汀報 醉文 タケノ 輝水 敏明 恒星 歳栄 清夢 志保 鈴江 清泉 芳枝 美栄

かいま見る本音に氷少しとけ  
 手さぐりの残留孤児が痣ほころ  
 川柳たけは洗うものがない  
 国づくりにけうりつものがない  
 今知つた顔で不義理に小さくいる  
 エプロンをつけたら母の気がわかり  
 ランドセルきまよはずこしたるかた  
 息抜きと思つた講座で鍛えられ  
 負けないうで欲しい寝顔の子を見つめ  
 それぞれの個性よみんな私の子  
 積木つむ二人に葛藤などはない  
 春の精さむらを追つて旅をする  
 雑草よドラフト外のたくましさ  
 入学へ眉あお青と朝を出る  
 愛に飢えた男の投げる変化球  
 自転車を押す坂道も夫となら  
 雑草の自己主張する花の色  
 旅人の磁石はいつも北を指す  
 わらべ唄峠を越せば聞けそうで  
 足踏みをすれば昨日の人になる  
 脚本のない人生にかける夢  
 気のせいへこっそり飲んでおく菜  
 叩き過ぎた石の橋からおこちる  
 何事も定めと悟れるしあわせよ

にた川柳会

西村

日本酒のメーカー黒田節が好き  
 コップ酒三角袋の豆を買い  
 片袖は濡れて片袖孫を抱き  
 また上る物価に主婦の白い息  
 仲人に縋一反と云うた頃  
 桜員の足をにぶらす菜種梅雨

はるみ 白汀 青居報 のぼら 静水 愛 純平 靖子 浄美 笑子 房子 紀 蘭幸 不朽 秀水 比呂子 鈍舟 節居 西合 かつ子 一路 里香 シゲヨ 早苗報 鉄花人 登美也 独仙 雪子 亀甲 千草

晩酌に酔つてはおれぬ子の寝顔  
 花の下酒が助けたうさ晴らし  
 しみじみと過疎地の人の情に触れ  
 どんぐりと判つた頃に海へ出る  
 老骨は上手にボケロと教えられ  
 家計簿の範囲でファミリーレストラン  
 涙拭いたあとでうれしさこみ上げる  
 敗戦は二度ない国のさくら咲く  
 借金が恐わく商人には向かず  
 ネクターイが気に入る人に今日も逢う  
 あきらめの言葉を朝の風が呉れ  
 ふと或る日男の足の裏覗く  
 廻り道したのはおぼろ月のせい  
 川柳ささやま 河原みのる報 早苗 多賀子 車楽 昇美子 弘朗 紫叻 舞吉 雄々 湖楽 宗弘 め女 裕

佳句地10選 (前月号から)

齊藤三十四選

心電図乱した女医のほそい指  
 迎え傘朝のケンカへ歩みより  
 山男やさしい妻と子に詫びる  
 子にかける母満願のない祈り  
 湯冷めしたクシヤミで止んだ立話  
 英文科出てて英語がしゃべれない  
 泣きどころ押えて煙草の輪をつくり  
 旅の風心の傷に触れず吹く  
 鍵っ子へ窓の響が話しかけ  
 一字ずつ罪消すように摩訶般若

草風 道子 与呂志 九二老 柳宏子 弘生 快哉 光代 飛鳥 右近

花言葉並べて若き日を偲び  
身を守る術を自然からもらい  
青空へ身障の児も高笑い

分身の初湯へ安堵の顔が寄り  
札束の重みで貝にされたまま  
法螺貝死して仏陀を叱咤する  
貝という肩書き小さく蜷生

原っぱの風にやさしく犯される  
原文の儘では読めぬ老母の便  
左遷の子広い原野や川が好き  
豪華さをメロンが語る引出物

引金の安全装置は妻がもち  
善人は掛け引きのなま道を行く

東大阪川柳同好会

齊藤三十四報

初孫に年金はたこかほつとけぬ  
吉報が一口气に我が家をかけぬける  
気が合つて互の愚痴を慰める  
うぶ声をのせて娘の便り来る

吉報はよいが学費に気が重い  
吉報が着くなり届いた菰被り  
吉報をじっくり聞いてるかがと  
吉報を足音高く持ち帰る

薄情な男へ吉報来る四月  
白酒をカルピスに替えひなまつり  
年金でくすぶっている気楽です  
本当に気楽だろうかアドバルン

税金で泣きたいギヤラにまだ遠い  
一筋の芸にギヤラには触れず生き  
ひな祭紳士淑女は食へざかり  
青い目の人形もあるひな祭り

片方の義手使えと欲が出る

久子 可住 和子 百合子 越山 法子 貞子 文平 与志 千代子 宗珠 栄樹雄 益孝 美子 千代子 弥山人 慶三 善紫 度 良京 岳人 綾珠 三十四 かずを 鎮彦 湖風 白屯 喜一郎

片方ずつうまく丸める苦勞人  
片方の運命線は大吉で  
川柳しんぐう

不発弾出てから地価がもめ始め  
原爆を不発で捨てた日を希う  
花見酒を不発列車にくじかれる  
満開の桜の下の不発弾

ひと押しへ味方の不発に砂をかむ  
新妻の名を呼んでみて用もなし  
新妻の失敗までも可愛くて  
新妻となる印鑑へ海満ちる

真つ白いエプロン新妻らしくする  
新妻の速さが希望の灯をともし  
叶えたい希望やつぱり金が必要  
老人の希望は無事に生きるだけ

希望に炎える男の歩巾狂わない  
希望の芽親の欲目につみ取られ  
言い訳を通して見たが気の重さ  
言い訳を考え乍ら遅刻する

一言へ二言言い訳ついでくる  
言い訳へ二言言い訳ついでくる  
言い訳の練習テストを見せる前  
川柳化粧檜

よもぎ摘む指先春の匂いする  
貧富の差もなく雪は屋根の上  
清貧の庶民直撃する値上り  
喫茶アンド軽食として峠茶屋

雪堂で命を分けたチヨコレート  
顔と衣裳みんな変化の参観日  
鶏よ金の卵を生んでくれ

柳宏子 醉々 十郎 正博 千寿子 英子 ひろ子 溪水 明男 登紀夫 富子 道子 利凡 大輪 華水 笑三 昌子 八千代 まさ子 薫子 真琴

植村客遊子報

紅月 秋月 岳詩 葉香 奮水 實男 越山

古い身の安泰願う寺社詣で  
同じ雪南の国ではよろこばれ  
卵酒のんで寝る夜の連れなくて  
真相を知って無口になつて来る  
ライバルの突刺す視線から逃げる  
職の無い脚だがベタル強く踏む

川柳わかやま 堀端 三男報

空っぽの頭比べているゲーム  
心配はするな自分以上に写らない  
身勝手な夢を子どもに押しつける  
波一つ立てて別居の母が去に  
一匹の雑魚へも波は容赦せず  
明日という波があるから耐えている

絵合わせのゲームの鼻を持っている  
ゲームから外れて少年病んでいる  
ゲームからヒントさぐっている男  
真実を映して叱られる鏡  
岩に散る波の青春かも知れず  
ウインドに写す素顔に年を知る

悪いとこ許り不憫な生写し  
古ぼけた写真に記憶確かめる  
いらだちを写せば鏡も不愛想  
人波となる私もポートピア  
根廻しが効いたか男波に乗る  
愛憎の独楽をぶつつけ合う夫婦

生命ある苔をテトラポットに着ける波  
晴姿写して今日から他人のもの  
菜の花句会 高杉 鬼遊報

母の日に美た卵でうどんすきにする  
着物が米に化けた頃懐かしむ  
彼と彼女が強く生きてる町はずれ

永楽 大鷹 拍秋 白李 三青 客遊子 三男報 醉々 凡九郎 秀雄 弘生 誠太 規不風 武紀夫 武太 勇太 三千代 稚代 柳宏子 克子 十子 賀寿子 武雄 寿美数 登志代 与志 好子 寿馬

おいしいコーヒーを入れますという野心  
 好きなドレスを売って町とおぼえとく  
 税金が化けると恐い再軍備  
 一つの日か星になるのが砂の夢  
 主義主張持たず睡った城下町  
 煙突の高さを屋根は許せない  
 しゃれこうべ南の砂を抱いている  
 離婚宣言それから化けぬことにする  
 負け犬になる北風の寒い風  
 砂けむり援軍の靴近くなる  
 今日汗屋台のコップ酒に化け  
 箒目をいれて歩けぬ砂の庭  
 大阪湾の歴史が消えた潮干狩  
 職人が化ける背広を持つている  
 砂浜の愛という字は消えやすし  
 さて降りるとき煙突の高いこと  
 化け者は私朝昼晩の顔

虹川柳倶楽部

新岡回天子報

川柳後集

井上柳五郎報

栗花

夕美

勝美

頂留子

酔々

糸葉

鬼遊

弥生

雀跡子

道子

柳宏子

雪枝

悦郎

健司

射月芳

重善

凡九郎

果しない欲望明日に賭けてみる  
 欲張りが長者番付まものり  
 口上手裏で色欲覗かせる  
 きつい言葉には欲が絡み合い  
 三日目で初心とくくに消えており  
 女文字封書のためよつきつ期  
 妬く妻にまだ脈がある倦怠期  
 ボケトの中のマツチに妻は妬き  
 妬く角を隠して娘流に付き  
 口先で褒めて心で妬く女  
 愛想の良い新婚に少し妬き  
 新婚の朝ははじらう顔で明け  
 物干しも新婚らしい色で揺れ  
 新婚の妻の味見は目をつむり  
 新婚をひやかす顔が待っている  
 好調とて初心の涙忘れまじ  
 定年が近づき初心にふと返り  
 まっすぐな道しか初心の目に見えず  
 要領を覚え初心を捨ててくる  
 衣食住足って嫉妬の火が燃える

南大阪川柳会

中川

滋雀報

小松園

明日昇る陽へ新人の体当り  
 新人養成立看板がさびている  
 交番へしぶしぶついて来た家出  
 しぶしぶで行く日の化粧のつてこず  
 四面楚歌男黙って北へ発つ  
 シナリオを一から直す四面楚歌  
 なるようになってしまった四面楚歌  
 四面楚歌校も桃も散り果てる  
 我が首を締めると知らぬ金を借り  
 読み切ったゆとりネクタイ締め直す

明日昇る陽へ新人の体当り  
 新人養成立看板がさびている  
 交番へしぶしぶついて来た家出  
 しぶしぶで行く日の化粧のつてこず  
 四面楚歌男黙って北へ発つ  
 シナリオを一から直す四面楚歌  
 なるようになってしまった四面楚歌  
 四面楚歌校も桃も散り果てる  
 我が首を締めると知らぬ金を借り  
 読み切ったゆとりネクタイ締め直す

明日昇る陽へ新人の体当り  
 新人養成立看板がさびている  
 交番へしぶしぶついて来た家出  
 しぶしぶで行く日の化粧のつてこず  
 四面楚歌男黙って北へ発つ  
 シナリオを一から直す四面楚歌  
 なるようになってしまった四面楚歌  
 四面楚歌校も桃も散り果てる  
 我が首を締めると知らぬ金を借り  
 読み切ったゆとりネクタイ締め直す

明日昇る陽へ新人の体当り  
 新人養成立看板がさびている  
 交番へしぶしぶついて来た家出  
 しぶしぶで行く日の化粧のつてこず  
 四面楚歌男黙って北へ発つ  
 シナリオを一から直す四面楚歌  
 なるようになってしまった四面楚歌  
 四面楚歌校も桃も散り果てる  
 我が首を締めると知らぬ金を借り  
 読み切ったゆとりネクタイ締め直す

明日昇る陽へ新人の体当り  
 新人養成立看板がさびている  
 交番へしぶしぶついて来た家出  
 しぶしぶで行く日の化粧のつてこず  
 四面楚歌男黙って北へ発つ  
 シナリオを一から直す四面楚歌  
 なるようになってしまった四面楚歌  
 四面楚歌校も桃も散り果てる  
 我が首を締めると知らぬ金を借り  
 読み切ったゆとりネクタイ締め直す

明日昇る陽へ新人の体当り  
 新人養成立看板がさびている  
 交番へしぶしぶついて来た家出  
 しぶしぶで行く日の化粧のつてこず  
 四面楚歌男黙って北へ発つ  
 シナリオを一から直す四面楚歌  
 なるようになってしまった四面楚歌  
 四面楚歌校も桃も散り果てる  
 我が首を締めると知らぬ金を借り  
 読み切ったゆとりネクタイ締め直す

明日昇る陽へ新人の体当り  
 新人養成立看板がさびている  
 交番へしぶしぶついて来た家出  
 しぶしぶで行く日の化粧のつてこず  
 四面楚歌男黙って北へ発つ  
 シナリオを一から直す四面楚歌  
 なるようになってしまった四面楚歌  
 四面楚歌校も桃も散り果てる  
 我が首を締めると知らぬ金を借り  
 読み切ったゆとりネクタイ締め直す

明日昇る陽へ新人の体当り  
 新人養成立看板がさびている  
 交番へしぶしぶついて来た家出  
 しぶしぶで行く日の化粧のつてこず  
 四面楚歌男黙って北へ発つ  
 シナリオを一から直す四面楚歌  
 なるようになってしまった四面楚歌  
 四面楚歌校も桃も散り果てる  
 我が首を締めると知らぬ金を借り  
 読み切ったゆとりネクタイ締め直す

明日昇る陽へ新人の体当り  
 新人養成立看板がさびている  
 交番へしぶしぶついて来た家出  
 しぶしぶで行く日の化粧のつてこず  
 四面楚歌男黙って北へ発つ  
 シナリオを一から直す四面楚歌  
 なるようになってしまった四面楚歌  
 四面楚歌校も桃も散り果てる  
 我が首を締めると知らぬ金を借り  
 読み切ったゆとりネクタイ締め直す

明日昇る陽へ新人の体当り  
 新人養成立看板がさびている  
 交番へしぶしぶついて来た家出  
 しぶしぶで行く日の化粧のつてこず  
 四面楚歌男黙って北へ発つ  
 シナリオを一から直す四面楚歌  
 なるようになってしまった四面楚歌  
 四面楚歌校も桃も散り果てる  
 我が首を締めると知らぬ金を借り  
 読み切ったゆとりネクタイ締め直す

明日昇る陽へ新人の体当り  
 新人養成立看板がさびている  
 交番へしぶしぶついて来た家出  
 しぶしぶで行く日の化粧のつてこず  
 四面楚歌男黙って北へ発つ  
 シナリオを一から直す四面楚歌  
 なるようになってしまった四面楚歌  
 四面楚歌校も桃も散り果てる  
 我が首を締めると知らぬ金を借り  
 読み切ったゆとりネクタイ締め直す

明日昇る陽へ新人の体当り  
 新人養成立看板がさびている  
 交番へしぶしぶついて来た家出  
 しぶしぶで行く日の化粧のつてこず  
 四面楚歌男黙って北へ発つ  
 シナリオを一から直す四面楚歌  
 なるようになってしまった四面楚歌  
 四面楚歌校も桃も散り果てる  
 我が首を締めると知らぬ金を借り  
 読み切ったゆとりネクタイ締め直す

桂風  
 定平  
 元一  
 哲郎  
 佐加恵  
 柳五郎  
 健夫  
 和一  
 梁太  
 七面山  
 博友  
 青銅  
 秋月  
 秋虎  
 久米雄  
 恒洋  
 玉水  
 草風  
 番茶  
 照路  
 小松園  
 千梢  
 千雀  
 滋子  
 信治  
 恒明  
 文秋  
 智子  
 健司  
 憲祐

締めた戸の音に怒りがははけける  
 小遣いを締められ小さい汚職する  
 風と陽と新芽でこの愛育ちそう  
 毒草の新芽もあしたを待っている  
 伸びる芽をまたまた駄目にした過保護  
 消えかかる炎からCM派手にする  
 CMへ社長みずから顔を売り  
 ゴキブリをまた見せられるだろう夏  
 CMの中の水着は泳がない  
 新人というネクタイの彩がある

どんぐり川柳会

谷垣

俺の釘抜いて息子が育つのか  
 時は金へヒーホテルで育てられ  
 竹トンボ見事に飛んで子は巢立つ  
 お名残りは惜しいが眠いのに困り  
 孝の字を忘れ着いた背の高さ  
 手さぐりで愛確かめている不安  
 西陣に育って恋の帯を織る  
 育ったらもめごとになる柿の種  
 子が育ち柱時計に雨期が来る  
 複雑な育ちと思えない素直  
 孫の育つ迅さわが齡確かめる  
 凡人の夢負けまじと子の育ち  
 百粒のどんぐり十粒ほどの育ち  
 足跡をアルバムに見るなつかしき  
 悪の芽がどんどん育つ金の月  
 旅人に名残りを惜しむ石仏  
 酔うと直ぐ育ちがわかる河内弁  
 育つ子へ母が嬉しいランドセル  
 足跡をデンデン虫は振りむかず  
 足跡を残さぬ知恵も厭道

洋生  
 弘生  
 楓幸  
 美幸  
 柳五郎  
 君子  
 あいき  
 柳伸  
 悦郎  
 酔々  
 史好報  
 健司  
 鬼遊  
 鎮彦  
 凡彦  
 憲祐  
 真砂  
 千代三  
 醉々  
 岳人  
 悦郎  
 飄太  
 喜風  
 吸江  
 儀一  
 薰風  
 星斗  
 弘斗  
 雅風  
 勝美  
 射月芳

## 第17回路郎忌・七月句会

日時 七月七日(火) 午後六時  
会場 金属会館

南区鰻谷東之町10番地  
地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ  
電話 271・3935番

兼題 おはなし  
「眠る」 川村好郎  
「惚れる」 高杉鬼遊選  
「石」 児島与呂志選  
「正義」 磯野いさむ選  
西尾 栗選

席題 二題 当日発表  
会費 三百円

各題三句以内厳守

★投句は句箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川 柳 塔 社

8月の兼題 「脇役」 「急用」  
「脇潮」 「急絵」

本社8月句会は7日(金)6時から

## 募集

### 九月号発表 (7月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 栗選  
水煙抄(10句)正本 水客選  
愛染帖(3句)橘 高 薫風選  
課題吟(各題5句以内)  
「始 発」 植山武助選  
「花束」 大森孝華選  
「鮎」 増田竹馬選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内、文字は楷書で新かなづかいにしてください。

### 十月号発表 (8月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 栗選  
水煙抄(10句)正本 水客選  
愛染帖(3句)橘 高 薫風選  
課題吟(各題5句以内)  
「先手」 本多清人選  
「粗品」 川崎秋女選  
「泡」 荻野鮫虎狼選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限り、★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

7月の常任理事会は2日5時から

定価 五百円(送料45円)  
半年分 三千二百円(送料共)  
一年分 六千三百円(送料共)  
昭和五十六年六月二十五日印刷  
昭和五十六年七月一日発行

編集兼 中島蓬太郎  
発行人 藤原童心社  
印刷所 藤原童心社  
〒542 大阪市南区鰻谷中之町二〇番地  
発行所 川柳塔社  
電話(06)271-3985番  
振替口座 大阪・三三三六八番  
三和銀行心斎橋支店  
普通預金口座番号・一〇二七八三

何を選んでいただくかは先様におねがいして  
タカシマヤの商品券を  
お贈りするのにも心に  
くい贈物かと存じます

1000円から  
10000円迄  
大阪・東京・京都  
3店に共通です

**高島屋**

なんば 日本橋  
大塚 東京 京都

▼川柳塔通算六百五十号をお届けする。従来ならば何らかの記念行事をすべきところだが、来年の五月には川柳塔と改題しての二百号発行を控えているので、満を持すことに決まった。

▼「路郎を知らぬ路郎論」は、論というより短い感想に過ぎないが、路郎忌に際

しての特集とした。路郎、殿乃ご夫妻を中に、不朽洞の門下生多数の個性的な家族は、われわれの誇りとするところ、いいご先祖を持つことは、大いなる力であり、仕合せ事でもある。

▼生々庵主幹は自宅でリハビリ専念、歩行困難克服に懸命の努力をしておられ。従って今月の巻頭言は、栗副主幹に執筆を願った。

▼篠山の小西無鬼氏死去。「デカンショ」を哀しく歌い悲しげり薫風」(薫)

うこと。コレホントカナ? 関西では、蒲焼をマムシという。ウナギと鰻が似ているからではなく、「真蒸し」という意味だそうである。コレホント。とにかく夏の土用の道頓堀界隈は、そこはかとなく、蒲焼のいい匂いが漂います。(酔)

▼作品それぞれに四季の韻があつて、炎暑に、雪の作品を読んでも実感から遠いものとなり、共感を呼ぶことが少ない。それほど極端ではないが、柳誌に発表される雑詠で、新年の句が三月号に載るのが常識であっても、何かそぐわないのは誰もが感ずることと思われる。現在の作品が、十月号に掲載されると思う時、十月の句を作ることができないものだろうか。勿論、季を超えた作品は別であるが、これほどの配慮を願うのは無理なことだろうか。反面、その機に詠うのが本当の句であるように、信じるのも理にかなつてはいるが、本来、川柳そのものは事実そのものでない作つた

ものだから、発表の機を考えるゆとりがある方がいいように思える。(き)

▼カニサポテンが今年も真赤な花をつけた。数年前に二百円かそこらで買った安い鉢で、同じ頃に買ったサツキや白梅は枯らしてしまつたのに、これだけはくたばることなく、毎年花を咲かせてくれる。路郎先生もジャポテンが好きだったらエッセイに「随分うっちゃらかしにしておいても平気

で、花もつけるし株も殖えて、私のような植物の面倒を見る時間を持たないものにとって、まことに都合のよい植物である」と書いてある。確かに生命力の強い植物ではあるが、やはりこれまで世話をしてやらないま、年に、花の数が減り、勢いがなくなつてゆく。何もしないで立派な花を期待するのは間違いだ。路郎忌を迎えると、いつもそう思うのだが。(史)

▼万葉集巻十六に大伴家持の歌がある。「石麻呂に我物の申す。夏瘦せによしと言うものぞ。武奈伎によし食せ。」(石麻呂殿に、私がおのを申します。夏瘦せには適葉だ、と申して居ますものです。鰻を取つてあがりなさい)。土用の大厄の日。は、鰻にまつてはウナギの日。なぜウシの日にウナギを食べると効くのかは定かでない。物の本によると、江戸時代平賀源内が、鰻屋に頼まれて「今日は丑」と看板を書いたのがはじまりとい

肉体疲労時のVB<sub>1</sub>補給に——  
**アリナミンA**

アリナミンA25の効能—肉体疲労時・病中病後・妊娠・授乳期のビタミンB<sub>1</sub>補給、神経痛・腰痛・筋内痛・肩こりの緩和、脚気。☆説明書をよく読んで正しくお使いください。☆くわしくは医師、薬剤師、薬局、薬店にご相談ください。

武田薬品工業株式会社 〒541 大阪市東区道修町2-27



ヤングのための  
ガジュアルウエア

Kurabo fabrics

クラブウ  
ガジュアルウエア

倉敷紡績株式会社

昭和四十一年一月九日 第一種郵便物認可  
昭和五十六年六月二十五日 印刷  
昭和五十六年七月一日発行 (毎月一日発行)

不思議なる時の技と  
精妙なる手の技がくみしあい  
ここにひとつの芸を見せる。



—陶然たる名人芸—  
**サントリーオールド**

標準的な小売価格2,770円 / 製造・販売 サントリー株式会社

南紀 和歌山 四国でのお泊りは——

## 南海電鉄サービスチェーン

### 《ホテル・旅館》

白浜温泉——忘れぬ はまゆうの宿  
政府登録国際観光ホテル **ホテルパシフィック**

政府登録国際観光旅館 **朝日**

勝浦温泉——海に浮かぶパラダイス  
政府登録国際観光旅館 **中の島**

湯峰温泉——山ので湯で山菜料理  
政府登録国際観光旅館 **湯の峯荘**

和歌山・新和歌浦——海岸美が楽しめる  
政府登録国際観光旅館 **萬波**

徳島・鳴門——うずしおの宿  
政府登録国際観光旅館 **鳴門**

政府登録国際観光旅館 **鳴門公園ホテル**

紀北・橋本——ゴルフの宿で季節料理  
観光旅館 **紀の川苑**

大阪・泉南淡輪——魚つりに ゴルフに  
観光旅館 **淡の輪苑**

大阪・なんば——清楚で近代的なホテル  
**ホテル南海**

お問合せ・お申込み ■ 南海国際旅行・日本交通公社  
サービスチェーン大阪案内所  
☎06-631-0222



# 南海電鉄